

医家芸術 後期号 目次

62 卷 通巻 635 号 (2018 年度)

◇医家随想

早かれ遅かれ

豊泉 清 …………… 2

サカナナマズになつてみる

出来 尚史 …………… 4

記備談語 -11-

佐藤 玄祥 …………… 14

アメリカで見た日本映画

鈴木 啓之 …………… 30

事前指示書

(終末期の医療・介護・生活など)

浜名 新 …………… 39

文明開化 童戯(どうけ)百人一首

河鍋 楠美 …………… 47

チェーホフを読む (16)

藤倉 一郎 …………… 50

見えない法則

八潮 弘三郎 …………… 52

イスラエル再訪

和田 秀敏 …………… 73

医芸俳壇 …………… 79

医芸歌壇 …………… 80

◇ほん

『前進』

林 宏匡 著 …………… 81

プライマリケアに活かす

『臨床耳鼻咽喉科学』

白幡 雄一 著 …………… 81

白矢勝一絵画展 …………… 83

野口眞利絵画展 …………… 85

編集後記 …………… 86

表紙の言葉 …………… 86

原稿募集のお知らせ …… 82

医家随想



早かれ遅かれ……

豊泉 清

表題を見た瞬間に何だか少々おかしいと感じる人が大勢いると思われる。高校時代の英語の授業で、SONNER OR LATER を「早かれ遅かれ」と訳して減点された想い出がある。英語の語順通りに訳せば「早かれ遅かれ」でも良いはずだが、日本語では「遅かれ早かれ」と表現するのが常識だ。外国語の勉強よりも先に日本語の勉強をきちんとしておけという、英語教師のお説教が今でも耳に残っている。英語教師は日本語にも精通している

など、妙に感心した覚えがあり、それが契機となって国語の勉強にも興味を抱くようになった。外国語の勉強とは取りも直さず母国語の勉強である、今でも感じている。外国語が百点満点で、母国語が零点という脳ミソの働きは有り得ない。

左右(さゆう)を「みぎひだり」、表裏(ひょうり)を「うらおもて」のように、同じ内容を表すが、音読みと訓読みで順序が逆になる例がある。夫婦茶碗や夫婦箸の夫婦を訓で「めおと」と読む。「め」が女を、「おと」が男や夫を意味し、「めおと」は女を先に呼ぶから、音読み夫婦(ふうふ)と男女の順が逆になる。因みに紳士

淑女諸君という呼び掛けも、漢語では男性を先に呼ぶが、英語では LADIES AND GENTLEMEN のように女性を先に呼ぶ習慣である。英語以外の西欧語もやはり女性を先に呼ぶ習慣である。

優劣、勝敗、真偽、増減、強弱、明暗、善悪、美醜、開閉、進退など、反対概念を一对にした言葉は、プラスイメージを先に言う方が圧倒的に多いが、中には、寒暖、虚実、苦楽、陰陽など、マイナスイメージと思われる寒、虚、苦、陰などが先に来る表現もあり、どちらが先という原則は無さそうである。

高校の歴史の授業で、人間の学名の HOMO SAPIENS (ホモ・サピエンス) という言葉を習った。ホモは人間を意味し、サピエンスは「知恵のある」というラテン語の形容詞である。やはり高校の歴史の授業で直立猿人を意味する PITHECANTHROPUS

RECTUS (ピテカントロプス・エレクトウス) という言葉を習った。ピテクスが猿、アントロポスが人間を意味する合成語で、猿人と訳せる。エレクトウスは真つ直ぐに立っているという形容詞である。形容詞が名詞の後に置かれる言語があることを、この時初めて知った。

フランスのパリに日本人観光客にも人気のあるムーラン・ルージュというキャバレーがある。ムーランは風車小屋、ルージュは「赤い」という形容詞で、やはり形容詞が名詞の後に置かれる。ワインも VIN ROUGE (ワイン・赤い) や VIN BLANC (ワイン・白い) という順序で表現する。ラテン系の言語は日本語や英語と逆に、名詞・形容詞の順序で表現するのが原則である。

エイズという病気は後天性免疫不全症候群と訳されている。ACQUIRED (後天性) の A と IMMUNOLOGICAL (免

疫学的な) の I と DEFICIENCY (不全) の D と SYNDROME (症候群) の S を組み合わせると AIDS という略称になる。

スペイン語のエイズは、症候群・免疫不全・後天性という順序で表現するから、頭文字を並べた略称は SIDA となり、話し言葉では シーダと呼んでいる。南米出身の患者が弊院を受診し、スペイン語でシーダの血液検査を……と言ったが理解できず、メモ用紙に綴りを書いてもらって初めて理解できた。

空飛ぶ円盤の UFO (ユーフォ) は半ば日本語化している。UNIDENTIFIED (未確認の) の U と FLYING (飛んでいる) の F と OBJECT (物体) の O という頭文字を連ねた略称で、略さなければ未確認飛行物体という生硬な漢字語になる。

スペイン語のユーフォは、物体・飛んでいる・正体不明という順序で表

現し、OBJETO (物体) の O と VOLANDO (飛んでいる) の V と NO (否定) の N と IDENTIFICADO (確認された) の I という頭文字を並べると ONI (オブニ) と読める。これも南米出身の患者から教わった。

医学生時代に前を意味する ANTERIOR (アンテリオール) と、後ろを意味する POSTERIOR (ポステリオール) というラテン語を一對にして習った。その他にも SUPERIOR (スーペリオール) と INFERIOR (インフェリオール) や、SENIOR (シニア) と JUNIOR (ジュニア) など、IOR という語尾で終わる一對の言葉がある。

最近では午前と午後を漢字ではなく A.M. や P.M. というローマ字表記をよく目にする。A は前を意味する ANTE の、P は後を意味する POST の頭文字である。M は正午を意味する MERIDIEM の頭文字だから、正午の前正午の後という意味になる。

私ども日本人は「プロ」というカタカナ語から何を連想するだろうか。

大部分の人はプロフェッショナルの略語と解釈すると思われる。つまり本職とか専門職という意味で、アマチュアの対立概念と解釈できる。

プロフェッショナルのプロは「前」を意味するギリシヤ語の接頭語である。語幹のフェスの部分は「誓う」という動詞が語源である。つまりプロフェッショナルとは「前で誓う」と訳せる。古代ギリシヤでは、医師や弁護士など資格の必要な職業に携わる人が、神の前で「客をこまかすような仕事はしない」と誓ったそうである。そこから専門職という意味になった。前か後かというキーワードで集めた雑多ネタを「あとさき」構わず列挙してみた。

サカサナマズになつてみる

出来 尚史

自他ともに認めるへそ曲がりだ。

他人がAと言えどBと言ひ、右を向けば左を向く。特に意識してやつてゐるわけではないが、ついそうなつてしまふ。困つた性分である。周りに合わせる事ができないので、集団行動は難しい。そういえば小学校の通信簿には協調性「△」と書かれていた。まあ「×」でないだけましと言へばか。

そんな私が兜を脱ぐ存在がある。その名は「サカサナマズ」。サカサと聞くと、なんだか怪しげなことを思い浮かべる御仁もいるかもしれないでもこれはれっきとした魚（シノドンテイス・ニグリベントリス *Synodontis nigriiventris*）だ。英語名を upside-down catfish と云ふ。

その名の如く逆さま、すなわち腹を上にして泳ぐ。それも時々ではなくて常に逆さま、と言うのだから珍しい。もともと脊椎動物はその構造上、表と裏——すなわち背中側と腹側——の区別が明確であり、動く時は背中を上、腹を下にするのが普通だ。空を飛ぶ者ばかり、地上を走る者ばかり。水中を泳ぐ者も例外ではない。この基本を無視して完全な裏返しとは。この魚、よくよくの「へそ曲がり」に違いない。

これにはきつと理由があると思う。逆さまになることのメリット、人間には思いつかない利点とは？ はて何だろう。これはもう直接サカサナマズに聞くしかあるまい。しかしサマズ語ってどんな言葉？

私がこの珍奇な魚のことを知つたのは小学生の時だ。図鑑ではなく、とある学習雑誌。曰く「アフリカにいるシノドンテイスと言う魚は逆さまに

なつて泳ぎます」。たったそれだけの説明だった。漫画のようなイラスト付きだったような気がするがよくは憶えていない。この記事はぼんやりとしたイメージのまま、長い間私の頭の片隅にしまい込まれていた。

何十年も経ったある日、その記憶が蘇ってくる。家の階段を下りている時、突然その名前が降ってきたのだ。落雷のようだった。「シノドンテイス、シノドンテイス、・・・」と頭の中に鳴り響く。そうだ、すっかり忘れていた。シノドンテイスだ。いったいどんな魚なのだろう。毎年更新される「私が見たいものリスト」、そのトップにこの魚が躍り出た瞬間であった。

さあ、居ても立っても居られない。思いついたが吉日、というではないか。インターネットでサカサナマズを展示している水族館を探し出し、取るものも取りあえず新幹線に跳び

乗った。人間のへそ曲がり魚のへそ曲がりには会いに行くのだ。

名古屋で列車を乗り換え、着いたところは岐阜県各務原市。「淡水魚園 アクアトトぎふ」という所だ。四階建ての巨大な施設に、国内、国外の淡水魚がゆとりを持って飼育、展示されている。折しも「世界のナマズ大紀行」なる特別展を開催中であつた。オセアニア、南米、北米、ユーラシアなど世界各地から集められたナマズのオンパレードだ。

一口にナマズといつてもその大きさ、形態はさまざまである。見ごたえのある種類が多かつた。時間をかけてゆっくり鑑賞したいところだが、今日の目的は「シノドンテイス・ニグリベントリス」ただ一つ、と先を急ぐ。アフリカのコーナーに入ったところでお目当ての水槽を見つけた。

水槽は小さく、中は暗かつた。予想したものとは全く違つ。こんなところ

ろに魚がいるのだろうか。暗すぎてよくみえない。明るい大型水槽にいる一メートル級のナマズを見た後、だったので、なおさらわかりづらかつた。時間をかけて目を慣らし、怖いものでも見るようにそつと覗いてみた。あつ、いた！ 奥の方、青い壁を背景に魚のシルエットが黒く浮かんでいる。

全部で六匹。予想したよりずっと小さい。四〜五センチくらいだろう。丸い目の部分が淡く光っている。ヒゲも比較的はつきりと見える。体の方は輪郭しかわからないが、日本のナマズのそれではない。どちらかというと普通の魚の体型といえる。尾ビレもよく見かけるタイプだし、三角形の大きな背ビレは真つ直ぐ下に突き出ている。

む？ 背ビレが下に？ よくよく見ると腹ビレ、尻ビレは上向きだ。なんとこの魚、逆さまではないか。サカ

サナマズに会いに来て、逆さまにな
っていることに驚くべきではない。
そんなことは分かっている。それで
も実物を目の当たりにして、あまり
の不思議さに言葉が出なかった。

神妙に観察した。六匹とも腹を上
にして、ほぼ水平姿勢を保ったまま
だ。先程からほとんど位置を変えて
いない。ヒレの動きがなければ死ん
でいるのかと疑うところだ。これは
凄い。統率のとれたマスゲームとで
もいおうか。アーチ型の木が水槽に
沈められている。その下で漂う彼ら
は、運動会への出番を待つ児童のよ
うにも見えた。もつともこちらはナ
マズ、人間の子供と比べ可愛さは格
段に劣るのだが。

私はじつと見る。魚たちは少しも
隊列を崩さず裏返しのみまで泳いで
いる。きつとこの姿勢の方が楽なの
だろう。背中を上にしたら泳げない
のでは、という疑問も湧いてくる。も

しかしたら内臓も上下逆さまに付い
ているかもしれない。「そんなわけな
いだろう。馬鹿な人間だ」サカサナマ
ズたちの声が聞こえてきた。なんと
言われようと平気だ。はるばる君た
ちを見にやって来たのだから。そう
私は呟く。

何がきっかけだったのだろう。一
匹が群れを離れて前方に飛び出して
きた。速い！そして、えっ、背中が
上になっている！ あっという間だ
った。私の目の前を左から右へ、スイ
ーツと泳ぎ、水草の奥に潜り込んで
しまった。なんだ、普通に泳げるじや
ないか。びっくりすると同時に安心
した。ふうん、そうか。クロールと背
泳ぎの両刀使いだったんだ、君たち
は。

驚きが冷めやらぬうちに、今度は
別の一匹が水槽の底に降りた。これ
もいつの間にか背中が上だ。砂利を
敷き詰めた底に、腹を付けるように

して着地。何かを食べ始めた。苔でも
付いているのだろうか。這うように
少しづつ移動しながら口を動かして
いる。動きだけをみると、ハゼの仕草
にそっくりだ。



私の方に近寄ったので暗褐色の斑

点模様がわかるようになった。まあ一言でいうと地味な装いである。目も大きすぎるし、正直言つて可愛いと言う印象ではない。二匹移動した今、逆さに泳いでいるのは四匹だ。

水槽の他の場所に目を移してみる。手前の方、ガラスに近い所には長い石の塊が置かれていた。その石の窪みと水槽の底とが作るわずかな隙間——そこに、おつ、見つけたぞ。サカサナマズが一匹、二匹、三匹、四匹、五匹。いずれも腹を上にして石に張り付いている。狭いので背中が底の砂利に触れているのだが、彼らは一向に頓着する様子が無い。互いに重なり合っているかにも窮屈そうだ。そんなに詰めなくてもいいのに、とついつい同情してしまふ。

魚の色や模様はすっかり石のそれと同一。しかも身じろぎ一つしないのだからカモフラージュは完全といえよう。三十分以上見ていたのに存

在に気付かなかつた私も私だが——。

そうだ、まだサカサナマズの腹部を見ていなかった。この魚の腹は暗い色をしている（サカサナマズの学名 *nigri ventris* は「黒い腹」を意味する）そうだが、このように石に張り付いた状態では確かめようがない。一般の魚と違って腹の色が暗いのは腹を上にして泳ぐからだ、といわれている。白いままでは上から見て目立ちすぎる。捕食者、例えば鳥などに對してあまりにも無防備というわけだ。

本当に黒いのだろうか。腹側を見たいな、動かないかな、と思いつながら待っているうちに、一匹が身じろぎをして位置を変えた。よし、やった。腹が見えた。成程この腹の色、他の魚とは大違いだ。地の色は赤味がかったオレンジ、それが黒い不整形の斑点で覆われている。この斑点模様とんと側面から背中にかけての模様と

繋がっているのだ。要するに境界なし、一周ぐるりの斑点模様というところか。なんとというメリハリのない地味な衣装だろう。確かにこれでは目立たない。

暗い世界に目が馴れたせいか、隠れているサカサナマズに気が付いた。傾いた木の裏に二匹、別の石の片隅に二匹。泳いでいるものや先刻水草に隠れたもの、底を這っているものを入れて合計十五匹だ。いや、探せないだけで実際にはもつといるかもしれない。現在スイマーは四匹。残りの十一匹は休憩ないし昼寝組ですか。もう少し活発な魚かと思っていたのに、残念な気がしないでもない。これも予想はずれの一つ、といえれば一つであつた。

水族館の職員と思しき人が通りかかつたので話しかけてみた。
「サカサナマズについて尋ねたいところがあるのでが」

「お待ちください」と言つて連れてきてくれたのがシノドンテイス専任の人。研究者なのか、飼育係なのか、あるいは両方を兼ねている人なのかは不明。感じの良い若い人で、素人の私の質問に快く答えてくれた。以下問答の要点のみ。

——コンゴ川に棲息と書いてあるが、具体的にどのような場所に棲んでいるのか？

「コンゴ川の支流、流れの緩やかなところに群れを作つて棲む。川が氾濫した後に出来た池や湖、沼で見つかることも多い」

——ここにいるサカサナマズはコンゴ生まれ？

「その通り。コンゴ生まれのコンゴ育ち。水槽での繁殖には成功していないので、直接輸入している。現地で捕獲したものを空輸する」

——何を食べている？

「虫、苔、水草など。この魚は雑食で、

与えたものは何でも食べる。当水族館ではコオロギの幼虫を育てて餌にすることもある」

——思つたより小型だが、これは幼魚？

「ここにいるのは比較的若い魚だ。最大十センチ位まで大きくなる」

——寿命は？

「平均して四、五年」

——生まれた時からずっと背泳ぎ？

「孵化後二ヶ月くらいは背中を上にしていて、その後は逆さになつて泳ぐ。驚いた時や、水底にいる時以外は腹が上というのが基本姿勢だ」

——なぜ逆さになるのだろうか？

「まだよくは解明されていないが、一部の研究者の間では採餌との関連が有力視されている。この魚は水面近くで泳ぎながら、落ちてきた虫などを食べる。その際、ヒゲがセンサーとして重要な役割を果たすらしい。

三対のヒゲが最も有効に働くのが、

その長さや角度からいつて逆さになつた時と考えられる」

「長い時間をかけてサカサナマズはアンテナを上手に張り巡らせる姿勢を獲得し、水面下捕虫魚に進化した。ごらん下さい。髭の根元に膜が張られているでしょう。これが味覚センサーとして役立っています」

と言われて目を凝らしたが、水槽の中は薄暗いまま。残念ながら膜の存在は確認できなかった。ヒゲの位置が逆さに泳ぐことに関係しているというのはわかりやすい。他の種類のナマズは水の下層で餌をとるからヒゲは下向きでも構わない。サカサナマズは水面すれすれで落下してくる虫を狙う。ヒゲは上を向く。腹も上を向く。門外漢としてはこんなにかかりやすくていいのか、とかえって心配になる。

「平衡器官や運動機能の分析など他のアプローチからの研究も進んでい

るので、その成果を含めた新しい解釈が待たれるところです。」

——なるほど。ところで珍しい魚だけに気になるのは生存数。これは絶滅危惧種？

「絶滅危惧種ではない。売買目的で熱帯魚店でも取引されているが、現在のところまだ大丈夫だ」

えっ、熱帯魚店？ ということは一般の人も飼っているのか。稀な種だと思っていたけれど、ペットの一つだったとは。がっかりすると同時にこれからのことが一層心配になる。最前、人工繁殖が不可能だという話を聞いたばかりだ。今後人気が上がれば輸入数が増えるだろう。いずれ捕獲数が自然増を上回るといったことにもなりかねない。コンゴ川にレッドサインが灯る——そんな事態だけは避けたいものである。

熱帯魚店で飼っているならわざわざ岐阜まで来なくてもよかったのに、

と誰かの声が聞こえてきそうだ。しかしそれは違う。何が違うかといえど、多分緊張感。水族館の魚たちを訪問する時にはある種の緊張感が必要だと思ふ。威儀を正す。水槽の前に立つ。心を引き締めて対面する。魚も同じ地球に住む仲間。いつもその心構えで臨まねばと考えている。ペットの取引とはおそらく別の世界だ。

今回は管理の行き届いた施設で十分厳粛な気持ちを持って見学することができた。また専門家からの説明を得るといふ幸運にも恵まれた。予期しなかったことである。

係の人にお礼を述べて別れたのち、もう一度だけ、と思つて水槽を覗いてみた。いつの間にか沈木のアーチ下には六匹のサカサナマズが泳いでいた。隠れていた一匹と、底を這っていた一匹が隊列に戻ってきたとみえる。彼らの泳ぎは飛行に喩えればホバリングに近い。またしばらくはこ

の編隊飛行が続くのだろう。

他は皆静止した水槽の中、そこだけが絵のように際立つて見える。微妙に揺れるヒゲ、逆さまになった独特のシルエツト、そしてエキゾチックに光る目……。異空間がこの世に滲み出てきたのではないか。そう思いたくなるほど現実離れた光景であつた。

家に帰つてとくと考えてみた。先にサカサナマズのことを「へそ曲がり」と呼んだが、適切な言葉ではなかつたようだ。本物のへそ曲がり周囲に同調することは滅多にない。たとえ相手が仲間であつてもだ。観察したところサカサナマズたちはお互い寄り添い、見事に調和した動きを見せていた。裏返しになつて泳ぐのは確かに型破りといえる。だがそれはあくまで他の魚類と比較してのこと。シノドンテイス・ニグリベントリ

スという種の特徴としてみれば何の破綻もない。個々の魚はDNAの命ずるままに実に行儀よく振る舞っているだけなのだ。

そもそも「へそ曲がり」という言葉使用できる対象は人間に限られるのかもしれない。前頭葉を過度に発達させたが故に、奇矯な言動をもって他人から疎んじられるような変わり種も生まれる。それがまあ、たまには社会における多様性の証として評価されることもあるのだが。

それにしてもサカサナマズの運動能力は驚異的だった。素早く反転し、背を上にしても下にしても同じように巧みに泳ぐ。ここでいう「上」というのはもちろん重力が作用する方向。「上」はそれとは百八十度反対の方向を指す。重力は絶対者である。地球に存在する物すべてがその支配下にあり、逃れるためには宇宙空間にでも飛び出す以外ない。上は上、下はあ

くまでも下なのだ。しかるにこの魚この黄金律に頓着する様子が全く見られない。なぜ？

日本発の面白い研究報告があった。サカサナマズを飛行機に載せて、重力の変化が彼らの動きにどんな影響を及ぼすかを調べたものだ。放物線飛行をすることによって、受ける重力を0G〜2Gに変化させた。結果はどうだったか。混乱した他の魚がバラバラに動き回る中、サカサナマズだけは変わることなく悠然と背泳ぎを続けたという。

報告では同魚の平衡器官の解剖所見にも触れている。それによれば耳石（平衡砂 statoconia）の結晶構造が荒く、分布密度が低かった。耳石の動きが緩慢であれば、重力の変化を感じ取り難いのではないか、との推測だ。いずれにしても平衡感覚系さらに運動を司るシステムが特殊であることには間違いないだろう。そう

でなければ、彼らは重力を超越した宇宙的存在か、という話になってくる。SFの世界は嫌いではないが、今回ここに持ち込むのは遠慮しておこう。

なぜ逆さになって泳ぐのか。その理由の一つに空気呼吸を上げる学者がいる。サカサナマズは facultative air-breather だそうだ。状況に応じて空気呼吸をする魚という意味らしい。深い所で酸素が不足すると、魚は浅層に上がってくる。水面に近い所では酸素が多く溶け込んでいるからだ。それでも足りないとなれば、水面に口を突き出して空気を吸う。ただしこの場合は酸素を血液中に取り込むための仕組みが必要だ。浮き袋に繋がる血管網が発達しているのだろうか。詳細は不明だが、いざという時に空気呼吸ができることだけは確かなようだ。

そこで問題となってくるのは体の

向きである。サカサナマズの口は下方についている。これを考えると背中を上にして泳ぐより仰向きになった方が楽、ということになる。水面近くで酸素飽和度の高い水を鰓呼吸するにしても、水面上に口を出して空気を呼吸するにしても――。

さらにもう一つ。仰向きの姿勢に有利な点がある。水面下で泳ぐ時の水の抵抗が少ないというのだ。サカサナマズを使った実験で明らかになった。こちらは外国の研究である。流れの表層では波の影響があるため、深層よりも水の抵抗が強い。体軸の取り方次第でそれが軽減できるとの結果だ。それによれば、水面との角度が20度以下の背泳ぎならば、背ビレを上にして泳いだときに比べて水の抵抗が30%以上減り、消費エネルギーを50%ほど節約できるらしい。

採餌に有利、呼吸に有利、しかも効率よく泳げる、となれば、もうこの姿

勢を取るしかない。サカサナマズは実に賢い選択をしたというべきだろう。



Synodontis nigriventris

以下、私の想像する彼らの進化の物語。

へ元来サカサナマズは底生魚であった。背中を上にして泳ぎながら苔や水生昆虫を食べていた。そのうち何らかの理由――環境の変化による餌不足や水質の劣化など――によって深みから上がってくる。水の浅層では酸素も豊富だし、餌の心配もなかった。やがて試行錯誤の末に腹を上にするという最適の姿勢を見出す。浮き袋を改良した。ヒレの形を整えた（真つ直ぐ突き出た大型の背ビレは下方に向くとヨットのキールのような働きをするに違いない。さらにその後方にある脂ビレは水流を整えるのに役立つといわれている）。安定した、また迅速な泳ぎが可能となるよう筋肉、神経系に工夫を凝らした。大改造だ。長い時間がかかった。それでも彼らは見事に適応する。あとは見ての通り。世にも不思議な背泳ぎ

魚の誕生である)

シノドンティス属が地球に出現したのは三千万年前といわれている。二千万年前、彼らは六つのグループに分かれた。このうちの一つがシノドンティス・ニグリベントリスである。いつ頃裏返しになったかはわからない。逆さに泳いでいる化石でも見つければよいのだが、それは無理な話だ。エジプト古王国時代の壁画にこの魚と思しき絵が残っているという。もしそうだとすれば、ナイル川系のサカサナマズだ。紀元前二千年の昔から人々に知られていたことになる。さぞかし不思議がられたことだろう。これを食糧にしたかどうか、そこまではわからない。

サカサナマズは好奇心の強い魚に違いない。そうでなければ水底からわざわざ上ってこなかったはずだ。浅い所にはもつと餌がありそうだ、酸素がいっぱい吸えるかもしれない、

と思つても、並みの魚にはなかなか実行できるものではない。他のナマズたちが古巣に執着するのを尻目に、この冒険心あふれる魚は浅層に移住した。そして腹を上にするという独特の泳法を軸にした新しいナマズの世界を築きあげたのだ。ヴィーヴァ・サカサナマズ、コンゴ川の勇者！

さて、今日の私は伊豆の海にいる。逆さ泳ぎの疑似体験をしよう、と思つたからだ。アフリカは出かけるには遠すぎる。川での実験は沈んだきりになつてしまいそうで怖い。というわけで安易な選択——伊豆の海、であつた。

腹回りに溜まつた脂肪が魚の浮き袋がわりになるだろう。水中メガネを付ける。それから、ここが難しいところだが、スノーケルを無理やり曲げて空中に飛び出すよう水中メガネに固定した。これで仰向きのまま呼

吸ができる。忍者のような格好だ。準備が整つたのでここぞと思われ場所まで水に体を委ねてみた。もちろん腹が上。頭は顔に波がかかる程度の位置に保つようにした。それ以上深くすると、頭を先にしたままどんどん沈下、この世とおさらばになつてしまふ。

どれ、態勢は十分。俄かサカサナマズ、川ならぬ海に出現す、だ。曇り空だがむしろこのの方が好都合。カンカン照りはこの魚の好むところではない。少しずつヒレ(手足)を動かしてみた。ゆるりゆるりと移動する。波が穏やかなので危機感は皆無である。

崖の下まで泳いできた。木が何本か突き出してゐる。アフリカに生えている木とは違ふが、まあそのつもりで眺めよう。葉っぱが一枚ひらひらと落ちてきた。虫が付いていればサカサナマズは大喜びだろう。私は虫は食べない。どうせ落ちて来るな

らばた餅がいい、などと勝手なこと
を考える。

ふかぶかと漂っているうち、ある
ことに思いあたった。逆さまになっ
て水面近くで泳ぐことでサカサナマ
ズが獲得したものがもう一つある。
それは広い視界だ。夜行性の彼らの
視力は優れたものではなかっただろ
う。ぼんやりと周囲を見回すだけ
にとどまり、触覚や嗅覚、聴覚、あるい
は振動覚を頼りに生きていたに違
ない。浅層に上がってきて彼らは驚
いた。水の中の様子がこれまでより
よくわかる。見下ろすことで視界が
格段に広がったのだ。

さらに逆さになって川面に近づけ
ば、魚眼レンズを通して外の世界が
映りこんでくる。それまで見たこと
のない水の外的世界だ。その瞬間か
らサカサナマズは他のナマズたちと
は別の道を歩み始めた。水のない外
界をも感知できるスーパーナマズと

しての道である。水の中に道はない、
などと揚げ足を取らないでほしい。

それに夜行性だから何も見えないの
では、とも。夜であっても月明かりあ
り、星明りあり、全くの闇ということ
はあるまい。仄かな明かりの中で得
られる情報、それが彼らが生きるに
あたつての重要な抛り所の一つであ
った、と思うがどうであろうか。

サカサナマズ「もどき」の私として
はこの姿勢で視野の広がりを確認し
たいところだ。だが、試みてすぐに不
可能と悟った。水面上の景色は見え
る。反面、下方向は視界ゼロ。人間と
魚では目の位置が違うから当たり前
と言えば当たり前の話である。いや
視覚ばかりではない。聴覚も嗅覚も
味覚も触覚も……感覚器の構造、
機能すべてにおいて越えがたい差異
が存在する。真似をしようと思うこ
と自体ナンセンスであった。

それを言えば、今私がやっている

逆さ遊泳も彼らの泳ぎとは本質的に
異なるものだ。わかつている。わかっ
てはいるが、せつかくここまで来た
疑似体験。大目に見てもらつて、もう
少し続けることにしたい。雰囲気だ
けでも味わうために。

雲が移ったようだ。切れ間から太
陽が覗いている。眩しい光に晒され
ながら遠いコンゴの国を思う。コン
ゴ川の上空は晴れているだろうか。
今こちらは午後三時。彼の地では夜
が明ける時間だ。サカサナマズたち
が食事を終え、ねぐらに戻る時間か
もしれない。

大きな木が川面に影を落としている。
その下の水の中、岩の窪みが彼ら
の家だ。ジャングルに棲む鳥や獣が
目覚めの声を上げる時、サカサナマ
ズは眠りにつくのだ。岸を打つ漣の
音を子守唄にして——。ここはコン
ゴ川ではない。そして私は偽ナマズ。
それでも体に打ち寄せる波は心地よ

い。ゆらりゆらゆら、揺られているうちに、私もいつしか昼寝モードになつてきた。

なんだか騒がしい。近くで子供の声聞こえる。目を開けてみた。気付かないうちに浜の方に流されていたようだ。首を回すと、浮き輪に乗った子供が三人、嬌声を上げながらこちらへ迫つて来るのが見えた。おいおい、あんまり近づくんじやないよ、ぶつかるから。向こうへ行きなさい。だめだ、だめだ、ちよつと。あ、あゝっ！ドスン！衝突の勢いで私はぐらりと傾き、そして見事に転覆。ごぼごぼごぼ……。スノーケルから海水が入ってくる。慌てて水面に顔を出した。

言えないのか。全く失礼な奴らだ。あゝあ、せつかく気持ちよくサカサナマズごっこをしていたのに――。

こんなことなら、腹に大きく「天地無用」とでも書いておけばよかつた。

記備談語 11 (29・12・30・03)

佐藤 玄祥

三の酉

酉年の締めとして、今年の「お酉さま」は三の酉までであった。昔から三の酉の年は火事が多いと言われて来た。気象の変化は、現実不如実に有つたみたいだ。

毎年、練馬の大鳥神社へ参詣し小さな熊手を求め、半世紀続いている。景気不景気に拘わらず、境内では賑やかに、福を、富をそして商いには客を掻き集めるといふ大熊手の販売の

風習は続いている。

歌仲間「黒沢西吉」さんが居られる。名のとおり酉年生まれのお紳士だが、新曲の歌謡曲を完璧に歌われ、シャキツとした姿勢で歌う舞台を拝聴し、「おん年96歳」の大先輩がカラオケで楽しまれて居る姿に感動すら覚える。

NAK(日本アマチュア歌謡連盟)の歌謡曲審査基準にも「80歳以上」が設定されて来た程、年齢幅が広げられたが、いずれは「90歳以上」も指呼の間になりそうな長寿社会であり、元氣なお年寄りの活躍は、後輩の鑑(かがみ)でもある。(29・12)

30年の節目

東大教授御厨貴先生が、30年という月日を解説されて居た。来年は平成30年、世界標準の西暦と中華帝国秩序から発しながら、日本のオリジナルと化した「元号」が併用され、天

皇の崩御による改元と共に明治・大正・昭和・平成と二世一代で推移、今上天皇の退位のご意向が特例法の制定で現実化し、平成31年4月30日を以て平成の時代は区切りを迎えることになる。

西暦と元号歴を用いている近代150年間、日本人の意識も大体30年で括れる。明治30年・東京遷都30年（大正は15年だったが）昭和30年（戦後10年）高度成長期、平成30年新しい節目の様相を含む。

西暦と元号は、どちらも日本人の意識の中で併用されながらも時と場合によってその使用の度合いに差が出る。通算では西暦が勝るが、元号は時代が括れるのだ。つまり、2018年は記号的年表示に過ぎない。

(29・12)

年賀状の心

年末、高齢の友の年賀欠礼が家人

から届く。又、近年は終活の一環として「年賀状じまい」をする方が増えて居る。寂しいことだ。

長寿社会とは言えない55年前に、86歳にして92歳の友に年賀状で「千歳まで長生きを！」とエールを送った人物がおられた。小誌も昔から使って居た「広辞苑」(岩波書店)生みの親「新村出」さん(1876〜1967)が京都の「足利竹千代」さんに送った年賀状が発見されたのだ(東京新聞12/8)。

「言零(ことだま)の幸(さき)はう国の久寿(くじゆう)翁(おきな)ももとせ(100歳)越えて 千代栄えませ」。万葉集の日本の別称に、当時90歳すぎの「竹千代」さんを差し、千代(千歳)まで元気で栄えて欲しいと願いを込めた「竹千代」さんに掛けた表現である。

機知・才知・洒脱に富んだ先人の意を尊び、省略しがちにならぬ様、一方

的であつても年賀状は書き続けたいものだ。
(29・12)

正念場

中立の立場から小誌に、党派の話題を提供するのを躊躇(ためらう)したが、見聞を広げる意味で、ご容赦されたい。

民進党が衆議院選挙直前に分裂し、党の存在が危ぶまれたが、残られた議員の合意で選ばれた大塚耕平代表の変わった趣味に注目した。「仏教の研究」である。

釈迦の説法で唱えた「話し合うことは、聞き入らうことだ」の言葉を紹介し「この精神を共有すれば活路が見出され、必ず再生出来る」と報じられた。分裂後、外交・安全保障政策の違いから「立憲民主党」と「希望の党」に分かれたが、大塚代表は「諸行無常、全ての事象は常に変化する」と将来的な再結集の意欲を隠さなかつ

た。今まさに正念場を迎えている。
「正念」とは本来、悟りに至るまでの正しい道を意味する仏教用語である。政権を担える野党不在の中、民進党出身者は、党内で路線対立を繰り返して来た自らの戒めとしての正念場なのだ。
(29・12)

駅前ツリー

光の祭典は神戸ルミナリエやナバナの発光ダイオード電球(LED)イルミネーションが著名である。クリスマス頃の頃になると、電飾ライトが灯り冬の風物詩でもある。近頃、省エネの「LED」が普及し、六本木ミッドタウン・毛利公園等が、数万の幻想的なイルミネーションで賑わっている。

毎月ナツメロとミニコンサートを実施しているJR阿佐ヶ谷駅南口の会場コモンズビル6階から見下ろせる広場に、杉並区が管理している高

さ30メートル超の杉(アケボノスギ)の生木がある。計測では32・5メートルあり、世界一高い生木、これにLED15000個の白とシヤンパンゴールド色が点灯した。ギネス世界記録更新とのこと。駅前商店街が毎年実施し25回目という。午前1時まで。



(29・12)

世相創作四字熟語

平成29年の世相を表現する表題の優秀作品を住友生命保険会社が発表した。歌人の俵万智さんが選別し

たもので、応募総数12699通もあったそうだ。解説なしでも納得する名(迷)作である。転載させて戴く。

棋聡天才「奇想天外」

.. 藤井聡太29連勝

政変霹靂「晴天霹靂」

.. 衆議院突然解散

九九八新「救(緊)急発信」

.. 桐生祥秀選手百米9.98秒

蟻来迷惑「有難迷惑」

.. 各地で『ヒアリ』発見

金曜感謝「勤劳感謝」

.. 月末金曜プレミアムデー

悲煙楚歌「四面楚歌」

.. 受動喫煙対策

荷勞困配「疲労困憊」

.. 宅配業界現状

中央習権「中央集権」

.. 習近平国家主席への…

十円貼付「十円貼って」

.. ハガキ値上げ

世代皇代「世代交代」…天皇即位
便教熱心「勉強熱心」

…小学生向け「うんこ」ドリル
e t c …

日本語の意味の深さと当て字のおもしろさを時代にマッチさせた興味深い作品であった。(29・12)

透析と運動療法

薬学専門学校同期の一番若手で薬局経営の傍ら、地元大森薬剤師会と東京都薬剤師会の重鎮で議長も勤め、叙勲も受けられた酒匂功氏の計報が入った。透析しているのでクラス会には出られないと通知があつたが、家族葬を済ませたと聞き呆然とした。透析患者は「安全第一」と聞いたが、4〜5時間懸かる透析を週3回続けると、心臓の機能が低下し、運動不足の弊害も見聞されていたので、治療法は薬剤師のご本人の意志を通され

たと聞いて、何の助言(僭越ではあるが)も協力も出来なかつた不甲斐なさに、切歯扼腕の思いであつた。

最近、人工透析に行く運動療法の利点と注意点が発表され、腎臓リハビリの重要性を提唱される東北大医学部上月正博教授は、安全な運動療法で、一過性のタンパク尿が出て、長期的には運動した方が腎臓機能低下を補い、血中の老廃物除去の効果が高まるという。惜しい方を亡くして仕舞つた。(合掌) (29・04)

日本橋架橋(続)

名橋日本橋保存会の高架撤去を進めている「榮太楼総本舗」の細田さんが地下化について語られていた。

「日本橋川に空を取り戻す会」が小泉純一郎首相(当時)に提言。老朽化首都高速道路の更新を協議した国土省が、地下化も視野に国や東京都は東京五輪・パラリンピック開催の

2020年に向けての再開発進行の中、大会終了以降、高架撤去と地下化を目指すと言言した。何時迄も今の様な車社会が続くか疑問の中、完成まで10〜20年(道路局)、巨額の公費と長い工期の必要性も検討されなければならぬ。古い写真(日本橋で生まれ、育つた妹たち1954年)を見てあらためて中央に麒麟像、両端に獅子像が立つ石像橋名橋の重要文化財に「空を！」の必要を感じた。(29・04)



二つ吐く歌合戦(2017)

一年の締めくくり、紅白歌合戦(NHK)を佐藤正明さんの漫画で、良いお年を!

♪おいらはトランプ おいらが怒れば嵐を呼ぶぜ! 喧嘩がわりにツイッター叩きや①

♪よおー その若いの! 俺の言うことを聞いとくれ②

♪ボクはYesと言わない 最後の最後まで抵抗し続ける 僕は嫌だ!

③

♪「逃げない事 投げ出さない事それが一番大事」でもいいんじゃない④

♪〜てなこと言われて その気になつて 用地を買ったが大間違い ふざけやがつて!⑤

♪モリモリ カケカケ みんなしやべるよ、ゴニョゴニョ ムニヤムニヤ 疑惑は晴れるかな?⑥

♪希望という名なの あなたを訪ね

て⑦

♪ヤメてけれ ヤメてけれ 自公自公⑧

♪怒鳴ってしまったって ワン ワンワン⑨

♪愛 シャン シャン としてこの身に落ちて⑩

♪夢もチボウも無いよ 東京ぼん太⑪

【解説】①トランプ・②習・③金正恩・④プーチン・⑤籠池・⑥安倍夫妻・⑦前原・⑧枝野・⑨豊田・⑩香香・⑪小池。敬称略でした。(29・12)

天皇即位

今上天皇が退位され、皇太子殿下が即位される皇位継承の日程が、昨年12月正式に決まった。「平成」に続く新元号の検討が本格化される。

陛下が2019年4月30日に退位し、皇太子殿下が5月1日に即位されると、元号法には「皇位の継承

があつた場合に限り改める」とあり、特段の事情が生じない限り、改元は平成31年(2019年)5月1日を軸に検討される。

過去247の元号の中で、「平成」は30年3カ月で4番目に長い元号(日本元号史大辞典)となるそうだ。

元号を使う官民のシステムが広く普及している現状に鑑み、新元号の公表は本年中になる模様だ。昭和から平成に改元した手順を踏まえて、学者や有識者の懇談会や正副衆参議長の意見で決定する。発表は官房長官だった。

「二世一元」制度が定着しており、明治M、大正T、昭和S、平成Hの略号の重複しないことも考慮する必要もある。(30・01)

活性酸素

酸素呼吸している限り、活性酸素は生まれる。吸い込んだ酸素は細胞

内で、糖分や脂肪分が代謝されてエネルギーの基の物質を造る。その1〜2%程度が活性酸素になる（兵庫医大鈴木敬一郎教授）。活性酸素は他の物質と反応し易い酸素分子の総称で、呼吸の度に副産物として産製される。

弊害として脂質やタンパク質を酸化させ、細胞を傷つけるほか遺伝子を変異したり、損傷したりする。老化の原因といったマイナスのイメージが強い。勿論、体内には抗酸化酵素などがあり、除去機能が備わっている。ビタミンEやポリフェノール等も同じ役割をする。活性酸素が過剰になり、細胞修復が間に合わず、その結果糖尿病や高血圧・動脈硬化、さらにはガンの発症にも繋がりが易く、老化を早める原因の一つである。

強い紫外線や大気汚染・喫煙・飲酒等外因的要素もある。抗酸化酵素などは栄養バランスの良い食事と規則

正しい生活を送れば不足しない（鈴木教授）。
(30・01)

成人式

成人（元服）の儀式は新春1月15日に挙行されるものだった。効率よく連休するため、成人の日は一月の第二月曜日になった。

曾て、成人式の新成人の祝いに選挙管理委員会委員長が出席し祝福したが「選挙権18歳」になり、出席が無くなった。

この日、新成人のお嬢さんが振り袖を着られなくなった事件が起こった。晴れの日？レンタル会社の無責任な倒産？で東京近辺、神奈川、茨城等で被害が発生し、成人式を台無しにしてしまったようだ。

考えてみれば、女性の場合お揃いの振り袖姿と白のストールで全く画一化・没個性のスタイルで成人を祝うこと事態、豊かで平和な時代にな

ったものだと思う。

成人式のやり直しを計画している八王子市のようなサービスもあり、気の毒な「お嬢さん」達も気を持ち直して欲しい。
(30・01)

米寿と記備談語

私事1月8日（成人の日）、数え88歳の米寿を迎えた。既報（29・07）でご案内した「記備談語」が1冊（29・11まで）に纏まり、米寿と上梓を祝う集い^①が関係発起人9名の方々の協賛で、誕生日の当日に中野サンプラザ14Fで約百名のご参加で開催された。

身に余る光栄を感謝し、これからの高齢化社会の生き様（ごさま）の証として、来し方の自分史も含め、ご参列の皆様にも本物の「きびだんご」と共にエッセイ集を贈呈する事が出来た。発起人の各業界の名士の皆様のご挨拶と各節目の友情参加の歌手12名

の夫れ夫れの歌唱で華を添えて下さり、佐藤玄祥「晴れの日」を満喫させて戴いた。

掲載誌「信州の東京」に当日ご参加の長野県人会連合会常任理事糟谷妙子女史(ジャーナリスト)のルポタージュを3月号に収載したとご報告を受けた。今後引き続き「記備談語」を連載し続編の出版を目標に老化解防と健康に留意したい。(30・01)

百年前の混沌

新しい年を迎え2017年を振り返ると、北朝鮮の脅威(?)を別にすれば比較的穏やかな年であった。京都大学佐伯啓児名誉教授の世界観の論説が示唆(しき)に富んでいる。

トランプ大統領がおとなしく、さしたる成果も無く、EU(欧州連合)も多少落ち着き、世界の経済も比較的良好で、日本も戦後2番目の長期的景気回復だという。

昨年の政治は殆ど森友、加計に終始し政治家・芸能人のスキャンダルが連日マスメディアを賑やかし、平和もここに極まる様相だ。然し「平昌」での朝鮮南北統一チーム問題など良い傾向にありそうでも、裏では独裁者が「核」を手にし世界と対峙している。

百年前、世界は第一次大戦の真只中、その後世界秩序を組み立てる「羅針盤」が失われ第二次大戦から戦後の冷戦体制、そして米ソ二極構造でそれなりの安定を見たものの、徐々に百年前の混沌に変わりつつあると分析されていた。脆(もろ)い不安定な構造の上に日本の「平和」があり「羅針盤」を失ってはならないと指摘された。(30・01)

驚異の14歳

卓球の全日本選手権シングルス男子決勝で、14歳の張本智和君がベテ

ラン10回目の優勝を狙った水谷隼選手を4-2で破り、男女を通じて史上最年少の日本一に輝いた。

将棋の藤井聡太4段の29連勝の快挙に続く14歳の偉業である。

この驚異の記録は、卓球界では男子中学生とシニア選手とは、体力差やパワーの違いが肉体の成長過程で、14歳では不可能と言われて来ていた。女子の平野美宇選手が昨年記録した16歳最年少記録を大きく更新する。「14歳日本一」である。

卓球センスや負けん気の気力、技術に加えて、この一年の成長は、肉体的改造の成果だったと知る。それに加えて、今後の大人の身体となつて海外的強豪と戦う毎に、技術を吸収するスピードがより早く進めば、東京オリンピックでの金メダルに懸ける期待は大きく膨らむ可能性は高い。それにしても、各界での14歳の素晴らしい記録達成は、更なる期待と実

現を見たいものだ。(30・01)

硫黄(S)

硫黄(いおう)は黄色の元素で単体で産出し、火山国日本では箱根大涌谷や草津、別府温泉で硫黄の現物を見る事が出来る。

東北大学赤池孝章教授の研究チームが「哺乳類にも硫黄を使ってエネルギーを生み出す仕組みがある」と「ネイチャー(英国科学誌)」に発表された。

約40億年前、地球の大気に酸素が殆ど無かった太古に、原始的な微生物は硫黄を使って生命活動に必要なエネルギーを作っていたと考えられていた。現在の哺乳類は細胞内の小器官「ミトコンドリア」で酸素を使い、エネルギーを作っている。酸素呼吸と呼ばれる。赤池教授は「ミトコンドリア」に硫黄を含む化合物が反応する仕組みがありエネルギーの元

の物質と微量の硫化水素などが出来ることを確認した。

タマネギ・ニンニク・蕻・含硫黄アミノ酸等人体に不可欠な硫黄が人間の一部の細胞に無酸素状態でも活発に生命活動が行われ、ガン細胞も「硫黄呼吸」だという。ガンの予防や治療法の開発につながる可能性があるのだ。(30・01)

都心の大雪

平成26年2月と同じように冬の低気圧により、都心に23センチ以上の、それも日中から降り積もり、早帰り4時終業対策を講じていたようだが交通状況が間々ならず、駅頭で立ち往生するTVニュースが流れた。線路も電車が走っていれば都会の積雪は何とかなると見ていたが、寒気でポイント凍結で不通となるとか弱点もあるようだ。

「四助」(26・02)を思い出し、

出来るだけ自助で自宅前の除雪を10センチから3回実施したが、降りしきる雪は北向きの為積もり、朝方難儀した。四年振りの「都心の大雪」は、レインボーブリッジ上や高速道路でのスリップや渋滞事故に続き、羽田空港も欠航便が続く、滑走路の積雪で離着陸不能で閉鎖となり、交通網の対応に苦慮した思わぬ自然の「おきみやげ」に、雪国のかたがたのご苦労を体験した一日であった。そして25日朝は48年振りの氷点下4度の寒波襲来を記録したのだ。(30・01)

「生きていくあなたへ」

これは著書名である。発売3カ月で30万部突破のスピード発売の「命とは誰かのために使える時間のこと」と文字どおり命を懸けて遺され故日野原重明(平成29年7月18日105歳で逝去された)の著書である。

五十代の終わりに、あの日航よど号ハイジャック事件に遭遇され、運よく生還された日野原先生は「この与えられた命を、これから他人の為に使おう」と決心され、それから40年以上に亘って聖路加病院院長として、その信念を貫き通し、人生最後の時間を使つての本書であつた。是非ご一読して欲しい。

105歳でどうしても遺したかつた言葉として「100歳を越えても、自分の事は一番分らない。だから未知の自分に出合い続けることが楽しみなのです」と多くの人生経験から、健康長寿を全うされた遺書とも言うべき本書なのだ。これから尚生きて行く私たちへの大切なメッセージが詰まっている最後の言葉なのだ。(合掌)

(30・01)

日本劇場

昭和8年、(株)日本映画劇場が有

楽町でオープン。映画とレビューが売り物「日劇」として親しまれて来た名称が、平成30年2月4日消滅する。創業時からの半円形の王冠型(写真)の容姿は戦争中にも焼けずに「君の名は」の出会いで有名な数寄屋橋の真ん前でその威容を誇つていて、わたしの青春の想い出の場所でもあつた。

戦後、日劇ダンシングチーム(N/D)創立昭和11年)が再開、その後33年ウエスタンカーニバル(平尾・山下ら)が開幕、4重5重と入場者が取り巻く程熱気・活気を呈した歴史が懐かしい。銀座再開で昭和56年閉館した。59年現在の有楽



町マリオンが完成。「東宝(TOHCO)シネマズ日劇」として日劇を冠した映画館3館がオープン。本年2月、東京五輪に向けての再開発で日比谷に移転するため、懐かしい「日劇」の名は消滅した。昭和は更に遠い日のもになった。(30・02)

広告の見出し

読んで貰うために、見出しで興味を誘う。項目別タイトル(選択2から)
《世界》「裏切りの平昌」「文在寅」の妄動” 対北包囲網を「ぶち壊す」韓国、米韓同盟を粗略化がアジアを霍乱。『習近平「権力一極集中」の危うさ』 側近不足、孤独な独裁者の陥穽(かんせい)。『米中露「核軍拡競争」の新時代』「実践先制使用」に重きを置く米国。『米政権の次の火種「チャイナゲート」』メスが入る中国「対米諜報戦」の闇。

《経済》「日立製作所」東芝の二の

舞、海外原発で破滅の道へ。〃日本公庫も「不正融資」だらけ〃商工中金と同罪の「財務省植民地」。

《社会・文化》〃放射線治療の「暗部」〃無駄なガン手術が多すぎる理由、地位も給与も低い放射線医師、外科ばかりを崇め過ぎる時代錯誤の日本。〃日本医師会長「四選」の裏事情〃診療報酬増額。等 (30・02)

運転免許自主返納

昨年一年間に運転免許証を自主返納されたドライバーは、前年比22%増の42万2033人で1998年制度導入以降最多と発表(警視庁)され、75歳以上が25万2677人で、59.9%を占めたという。今後ますます増える、視野・判断ミス・修正遅れ・踏み違い等老人特有の行動が著しい高齢ドライバーの危険な運転は、自信・自尊心・自覚の三点に要約される。永年の経験と実力(実は老化で下が

るのだが)とオレは絶対安全運転を守っていると、年寄り固有の頑固一徹さで周囲が翻弄され、家族の勧め「返納」に応じないケースが多く、事故が起こつてからでは遅いことに気づかない。

昨年3月施行の改正道路交通法で認知機能検査が強化され、医師の診断が義務づけられた為、自主返納が進んだようだ。ただ、僻地や足の便の悪い地域への対応と交通手段の充足が必須で、行政も唯、取上禁止措置だけでなく、血の通った利便性を提供して貰いたいものだ。都内の場合、優待パスは有り難く利用している。(30・02)

無電柱化

地上の無電柱化を進めるため、国は制度設備に着手(1/14)するようだ。

欧州やアジアの主要都市の無電柱

化の現状は、ロンドン・パリの100%を筆頭に、台北・シンガポールの95%代、ソウル・ジャカルタの46%、35%に比べても東京都23区で8%、大阪市に至っては6%が現実なのだ。無電柱化は主に、幹線道路で進め

られて来たが、地震国日本の現状は災害時緊急車両(消防・救急)等の防災面での対応に苦慮せざるを得ない。全国で約3550万本の電柱があり毎年7万本ずつの増加の現状を見ると、道路1kmあたり5億円とも言われる工事費が地下化の障害を担っているようだ。2020年東京五輪・パラリンピックを前に、バリアフリー都市を目指すためにも、日本の遅れた分野と考え、挙国一致で取り組む課題なのをやっと国も重い腰を上げたようだ。狭い道で車を避ける安全柱(地帯)の役目と、先行する海外主要都市のギャップは見た目だけでは無いのだ。(30・02)

仮想通貨

これはインターネット上で取引される電子データで架空の「お金」の事であり、「NEM(ネム)」と言う。

日本では2017年4月、改正資産決済法が施行され、「仮想通貨」がプリペイドカードや商品券のような支払い方法として法的に位置付けられていて、円やドルと違い、実物の紙幣や貨幣が存在せずネット上の取引に口座を作り、金を振り込んで「仮想通貨」を求めパソコンやスマートフォンに保管するシステムで「ビットコイン」が代表格だ。

通常の貨幣は国や中央銀行が発行し信用力の源となっているが、「NEM」は利用者が「信用していること」が価値の裏付けとなっている。保有者の大半が投機目的で価格が乱高下し易く、世界共通のネット上の事、便利と危険は表裏一体。不正アクセス

スで時価580億円の「NEM」流し失事件に対し、金融庁は外部からのハッキングも視野に、問題を起こした会社に業務改善行政処分をするようだ。(30・02)

内視鏡画像とAI

益々高精度化する内視鏡画像から「胃ガン」を検出するシステムが公益財団法人ガン研究会で発表された。画像12000枚以上のデータを熟練医師に匹敵するレベルでコンピュータの人工知能「AI」を活用し、深層学習させ、病変を見つけられる様先端技術で、早期発見や正確な判断を下すことができると言う。

胃ガンの内視鏡検診は、医師の技量の差が出易く、ダブルチェックが学会の指針として義務付けられている。

多数のデータからのAIの学習が医師の負担を軽減させ、ガン特に「胃

ガン」の早期発見は根治出来るので、いささかも見逃せない「AI」のディープラーニング「深層学習」が期待されるのだ。臨床数や熟練経験の少ない、若手や僻地医療機関の先生方にはまとなし強力な指導サポーターなのだ。(30・02)

区長のエッセイ

中野区報2月号に田中大輔区長のエッセイ「小径より道」に中野区ゆかりの記事が二つ掲載されていた。一つは区長宛の年賀状「上高田功運寺」、もう一つは「生類憐れみの令」の中野「犬小屋」の件だ。

「功運寺(上高田4-11-1)」には吉良上野介美央(よしなか)の墓所があり、投書の主は吉良美央の名誉回復の依頼であった。吉良家の領地があった現在の愛知県西尾市などでは「名君」といわれられていて、ご存知の江戸城内での暴力刃傷沙汰が、浅野内

匠頭長矩(ながより)の切腹と家臣団の報復事件で『忠臣蔵』として日本人の心情に訴えた出来事。

もう一つは犬公方として評判の悪い歴史上の人物が、中野に犬小屋を造った5代将軍徳川綱吉の話。本来は犬よりも先に孤児や病人を守るためこの「令」は、福祉的な治世の先駆けだったというもの。区長曰く、常識や先入観に捉らわれず、物事を多面的・冷静に捕らえ、歴史を見つめる大切さを示唆したものだ。

(30・02)

トランスボックスアート

無電柱化(30・02)の一端として、街中のトランスボックスが地域の活性化に役立っている。一部ながら、それ迄電柱上にあった変圧器などの配置設備を収納しているトランスボックスが全国で5万基以上あり、その壁面を利用して、落書き防止を含め

て、一部地域で『まちの魅力発信と景観美化』のため、地図やデザインコンテストなどアートをコンクールを実施している。



都内11自治体(杉並・新宿・八王子など)ではそれぞれ工夫を凝らし、高円寺駅前では地元「阿波おどり」など(写真)周辺60基に、地元高円寺を連想させるアートが町のアクセントになっている。東京都は9日、今後10年間で進める無電柱化計画の素案に重点地域を環七内側にするを発表した。国も推進計画を今春まで策定の予定だ。電線・電柱が無いと、本当にスッキリする。無電柱化に拍車がか懸かるといい。(30・02)

確定申告

年度末に入り、税務署も確定申告で多忙になる。

毎年の事ながら、経費の領収書、生命保険の払い込み書など添付におおわらわの一般庶民にとって、この度最高裁が内閣官房報償費(官房機密費)の一部開示を求める判断を初めて示した件は全く遠い次元の話である。

「国の事務・事業を円滑・効率的に遂行するための経費」であるところの官房機密費は領収書無しで自由に使える金とされ、使途は公開されていない。

これ迄、明るみに出た使途は『餞別・パーティ券・分暮れの付け届け』等本来の使途とは言えないものばかり。一方地方自治体の議員の政務活動費は「調査研究その他の活動」に使用すべきもので、原則領収書が必要だが偽造が相次いで発覚している。

共通することは「公金」に対する認識の甘さだ。先の官房機密費は毎年約14億6000万円計上である。庶民の納税意識が冷え込んでしまう。

(30・02)

アンテナショップ

東京都内にある各県のアンテナショップで独立店舗は56店(29・4現在)、前年より4店舗増加、過去最多となり、各店の運営目的は「自治体のPR」「特産品の宣伝」の他47店が「田舎暮らし・UJITターン」を標榜し、前年の16店から3倍となったようだ。

中央区銀座の長野県アンテナショップ「ぎんざNAGANO」は、銀ブラついでに立ち寄れる気軽さが受け、立地の良さで大繁盛だが、過疎化対策の一環として、長野県への移住相談に応ずる「県移住交流センター」が開設された。具体的には、若手世代

の移住のため「医療費無料」や充実した「子育て支援」を持つ移住先の斡旋や紹介、移住が失敗しない行政の対応や、地元の人材を呼び込む様々な工夫を講ずる努力をし、人口減少の歯止めを掛けたい地方都市のために、アンテナショップがUJITターンの入り口としての役割を担っているのだ。ふるさと志向の為に有効だ。

(30・03)

非通知電話

このところ毎晩の様に、それも寝入り端や午前2時頃、「非通知」表示の電話が掛かって来る。出ると切れる。一説には在宅か不在の確認の犯罪臭のある行為とも言える。

そもそも、この「非通知電話」は何なのだ。自分の身分を隠して相手方を訪ねる訳だ。無視すればいいのだが、こんな制度が存在すること自体がおかしい。

レム睡眠は、生理的に約90分毎の山・谷のある「眠り」のレベルなのだが、この自然の「ねむり」を妨げる一方的な「非通知電話」は、迷惑以上に全く健康上有害である。睡眠の深さ浅さの繰り返しリズムに沿っていれば「脳」は休まるのだが、そんなことにおかまい無く一方的な行為は、肉体に対する正に暴力沙汰に匹敵する。

日常の電話の通話に何故非通知制度が存在するのか不思議だ。相手が判らなければ門は開けないのが当然である。時をわかまえない真夜中の無言の訪問はその対応に苦慮する。「迷惑ガード」を設定して対応したが、おかしな制度である。(30・03)

医療費削減

2年毎の診療報酬(*)改定が厚生労働省から発表された。国が負担する社会保障費は過去最大の約33兆

円（18年度予算ベース）で、歳出全体の3割超を占める。

このため政府は高齢化に伴う自然増を18年度1300億円圧縮する目標を掲げた。そして医療費の中で薬（くすり）の公定価格である「薬価」を市場実勢価格まで引き下げればこの目標を達成出来ることが判明した。

（*）診療報酬とは…医療を受けるのと公的保険などから病院や薬局等に支払われる報酬である。今回は介護報酬と同時改定になる。

今改定では、医療機関の役割分担を進め、高齢者のニーズが高い「リハビリ」や長期医療の施設を増やし、在宅医療の充実に重点を置いている。他の部門のみ微増で薬価のみがダウンした改正は、やはり政治力の違いか。超高齢化社会を迎え、今後益々増える高齢者が、不安無く過ごせる医療への転換が進むことを願うものだ。

（30・03）

懐メロ（なつかしのメロディ）

50年程前、懐かしい（当時の）歌を集めた幾つかの番組が人気を博し「懐かしのメロディ」の略「なつメロ」が一般的になった。当時東京12チャンネル（現テレビ東京）はまだ誕生したばかりの放送局で、昭和43年大晦日「NHKの紅白」とは無縁になった東海林太郎（しようじたろう）や淡谷のり子らを集めた「なつかしの歌声大会」を企画、これが予想外の高視聴率を記録し、「なつメロ」がクロージアップされた（合田道人氏）。

その歌が、その時代までタイムスリップ出来る「時代の歌」になり、「なつメロ」が時代を象徴する歌として、今なお多くの人達に支持されて来ている。番組は「年忘れにっぽんの歌」として、「TV東京」大晦日番組で健在だ。

5年前から毎月「なつメロとミニコン」として「なつメロ」を歌い新旧

不問の歌手によるミニコンサートの会を開催、今月で58回になる。世代によって「なつメロ」の時代の違いはあるが参加者はそれぞれの時代にタイムスリップするのだ。（30・03）

新六段の驚異

読売新聞は号外を発行した。藤井聡太五段が将棋公式戦で初優勝し、15歳6カ月最年少勝利を達成し、規定により新六段に昇進したのだ。

国民栄誉賞を受けた羽生竜王（公式戦初対局）を準決勝で破り、決勝で広瀬章人八段に勝ち、加藤一二三九段の持つ公式戦最年少記録（15歳10カ月）を4カ月更新し、中学生として初めて六段に昇進したこの急成長が号外に価する驚異の記録なのだ。

現在（3月14日）、藤井新六段は実質デビュー一年目（88年度の羽生善治竜王は実質デビュー3年目）。さらに、将棋大賞記録四部門「対局数

(70)・勝利数(59)・勝率(84%)・連勝記録(29・14継続中)「ランキングトップで、金字塔を達成、まだまだ続く快進撃、タイトル戦に登場二連勝すれば早ければ4月中に七段に昇段する。記録マニアにはタマラナイ出来事である。希望や夢では無い、現実の実力は誠に驚異の事実である。将棋ファンのみならず明るいニュースはこころ楽しいものだ。彼はやる。」

(30・03)

平昌冬季五輪の成果

カーリング女子の銅メダルはTV視聴率42.3%(2/24)と報道された。日本勢はメダル獲得数13個(金4・銀5・銅4)が冬季オリンピックでの獲得数で、閉会された。

前回のソチの結果を踏まえて、日本はナショナルチームとしての強化に励んだ結果として最高の成果を挙げた事になる。

スピードスケートの新種目マスタートで、高木菜那選手の2個目の金メダルは史上初、最も小さな(155cm)選手としてハンディ克服の活路(急加速や進路変更)を見出したものとして特筆すべきものであった。

500mのスピードスケートでオリピックレコード(2分53秒89)を記録した小平奈緒選手の金メダルは、1000mの銀と共に燦然と輝き信州松本の相沢病院(所属)共々、長野県人として心から祝福を捧げたい。男子フィギュアスケート羽生結弦、宇野昌磨選手の金・銀が霞む程、女子の活躍が目立った。今回の冬季五輪は政治問題が見え隠れしたが終われば総(すべ)て良く、平和の祭典となった。

(30・03)

薬剤師行動規範

日本薬剤師会は昭和43年8月26日制定の薬剤師倫理規定に基づき、

平成30年1月17日、表題の行動規範を公示した。「薬剤師」は医療の担い手として、生命の権利を守る責務がある(中略)。規範を列記し、自己を律するものとする。☆1~15

- ①責務。②最善努力義務。③法令等の順守。④品位及び信用の維持と向上。
- ⑤守秘義務。⑥患者の自己決定権の尊重。⑦差別の排除。⑧生涯研鑽。⑨学術発展への寄与。⑩職能の基準の継続的な実績と向上。⑪多職種間の連携と協働。⑫医薬品の品質、有効性及び安全性等の確保。⑬医療及び介護提供体制への貢献。⑭国民の主体的な健康管理への支援。⑮医療資源の公正な配分。以上。

項目は多岐に亘っているが「薬剤師」としての自分は、終生自己を律し、人格を向上し、知識を深め且つ健康に徹せねばならないのだ。言うは易く行うは難し。

(30・03)

誤嚥性肺炎予防運動

肺炎が関連して既報「のど仏様」(29・09)、「COPD死亡率急増」(29・01)で、三天死因の一つに急上昇したことを記したが、舌・咽頭・喉頭の運動機能低下や脳血管の疾患などが関連する神経がダメージを受けると、飲み込みに必要な「反射」に重要な影響を生ずるといふ。生きるための(本能的に)、食べる・飲む喜びと、語る・歌う発声と酸素を補給する呼吸を司るノドの器官は、咽頭の筋肉に依存している。機能強化のためにも日頃から、ノドの筋肉を鍛える訓練を行うことでその予防が可能である。

藤田保健衛生大学稲本陽子教授が提案された「舌の体操」は手軽に出る運動法である。先ず、舌を前後・左右・上下・歯茎の押し出し、巻き込みを各5秒間キープ。各10回とスプーンを使った舌の圧迫法(10秒キープ、10回)及び、おでこ押し戻し運動で首の筋肉の強化を行い、更にゴックン飲み込み運動2、3秒保持を指示された。誤嚥を防ぐ為にも即日実行されたい。(30・03)

年度末(卒業式)

年末は慌ただしいが、年度末は3月が多く、ひとつのケジメの時期である。

数え88歳の米寿を済ませ、この3月で三つの大きな任務を降りることになる。体力的には、見た目と行動力は若い人に負けない積もりでいくら頑張っても、老いの兆しの「聴力」の衰えは如何とも仕難く、迷惑の懸からない内にと引退を決意した次第だ。公職の一つは「学校薬剤師」、満87歳まで請われて50年間勤められたことは自分としても勲章である。6年生と共に卒業式に臨むのだ。二つ目は選挙管理委員会関係の「明る

い選挙推進協議会会長職」だ。聴力低下もマイクの使用で(事務方の好配慮)でそつ無く平成8年から22年間勤められた。三つ目は一般社団法人日本指圧協会副理事長だ。偶然、同時期に、いずれも有能な後任に引き継ぐ事が出来、ホッとしている。

継続は力だが、ちよつと長すぎた。健康に感謝である。(30・03)

※タイトル「記備談語」について

「記事・備考・談話・語録」の頭文字から「きびだんご」として、健康関連情報や関係団体の新情報、世相のニュースから勝手連的に、日々アンテナを巡らせ、頭の老化防止に努めております。ご覧下さい。少しでもお役に立てば幸いです。

薬剤師・指圧師・剣道6段・N A K 認定歌謡講師 佐藤 玄祥(博)

アメリカで見た日本映画

鈴木 啓之

米国サンフランシスコの日本人町（通称ジャパニーズタウン）に桑港国際劇場という100席ぐらいの小さな映画館があった。桑港はサンフランシスコの漢字表記である。この映画館で少し古くなった日本の映画が週替わりに上映される。カリフォルニア大学サンフランシスコ校（略称UCSF）に留学していたころの話である。仕事の後や週末の休みによく見に行った。

けっこう毛だらけネコ灰だらけ：

あるとき「男はつらいよ」がかかったので日系アメリカ人の女性と見に行った（図1）。渥美清演ずるフーテンの寅さんが歯切れのいい口調で香



図1) 旅先の寅さん（渥美清）

具師の口上をまくしたてる。「けっこう毛だらけ、ネコ灰だらけ、おけつのまわりはクソだらけ」とか「四谷、赤坂、麴町、ちゃらちゃら流れる御茶ノ水、粋な姐ちゃん立小便」とくると、日本人の多い場内はワツと湧く。一緒に行った日系三世の友人は何が面白いのか分からない。映画のあとで、なにが面白かったのか説明してくれといわれた。香具師の口上は語呂のよさ、リズムのよさが身上で、「おけつのまわりはクソだらけ」や「粋な姐ちゃん立小便」をそのまま英語に訳

してもひんしゆくを買うばかりである。いろいろ説明したが友人は肩をすくめ、両手を広げ納得のできないままに終わった。

サンフランシスコには日系アメリカ人がたくさん住んでおり、ずいぶんお世話になった。一世の出身地は広島や沖縄が多かった。日本の映画に興味を持っているひとも多い。太平洋戦争がかかわったアメリカ映画で、米軍の爆撃機が日本本土に爆弾を投下して、それが地上で次々と炸裂する場面は正視できずに目を閉じてうつむいていたという。

サンフランシスコで任侠映画

高倉健の昭和残侠伝シリーズがよくかかった（図2）。映画が終盤にかかると、着流し姿の健さんが白鞘の日本刀を手に敵地に乗り込む姿が映



図2) 東映任侠映画の高倉健

る。夜道の後姿がとくによい。雪が降
つているとさらによい。単身の時
もあれば、池部良や鶴田浩二が寄
りそつているときもある。道端の枯
れススキが風に吹かれてざわめく。鞆
からぞろりと刀身を引き抜く。月
光で刃が冷たく光る。思い入れた
つぷりのBGMがひびく。やがて刀を
振りかざしての大乱闘。返り血を浴
びた健さんが悄然と立ちつくす。そ
こにヒロインが駆け込み足元にしが

みつく。ヒロイン役としては藤純子
がよかった。

ややあつて「終」の字とともに場内
が明るくなる。観客は健さんになつ
た気分どころもち肩をそびやか
し、義理と人情の世界にとつぷりつかつ
たまま夜の駐車場に散る。サンフラ
ンシスコにあつてここだけは新宿東
映か池袋東映の深夜興業そのもので
あつた。

「砂の器」とハンセン病

野村芳太郎監督の名作「砂の器」に
出会つたのもこの劇場であつた。英
語の題名はCastle of Sandである。
松本清張の原作で、ハンセン病を背
景にしたミステリー作品である。大
阪大空襲や出雲方言などがからむ。
カメラはハンセン病を病む父親とそ
の息子である少年が巡礼姿に身をや
つしてさすらう姿を執拗に映す(図
3)。背景に映る日本の四季が美しい

ばかりに、父と子の哀れが際立ち胸
がつまる。清張の原作も読んだが、映
画の方がはるかに感動した。映像の
力である。脚本は橋本忍と山田洋次
が担当し、撮影は川又昴、音楽は芥川
也寸志である。この作品はいまも日
本で上映会が開かれている。

そのころ日本ではハンセン病はほ



図3) 「砂の器」の一場面 巡礼姿で流浪する父子

ぼ克服され、日常診療では診ることはない疾患であった。映画もむかしのはなしとして見ていた。ところが後年JICAのプロジェクトにかかわるようになって毎年バンコクに出向くと、アジアの国々ではハンセン病と闘いのさなかであることを知った。バンコクの病院のハンセン病外来には子供や僧侶の患者さんも受診する。別の国から入国しハンセン病の疑いで病院に送られてきた若い男性がきた。タイの医師が体幹の発疹から塗抹標本をつくり抗酸菌染色をほどこした。それを顕微鏡で覗くと、赤く染まった稗状のライ菌がたくさん見えた。世界にはハンセン病患者が1000万から1500万人もいることを知り認識をあらためた。

時代劇の三船敏郎

時代劇では「風林火山」が印象のこる。井上靖原作、稲垣浩監督の作品で

ある。武田信玄を中村錦之介、山本勘介を三船敏郎が演じた戦国合戦絵巻である(図4)。石原裕次郎が上杉謙信役で出演した。川中島の合戦の場面では、顔を白麻の五条袈裟でつんだ騎乗の謙信が同じ装束に身をかけた影武者数騎を従えて現れるシーン(図5)は新鮮であった(図5)。このこ



図4)「風林火山」のポスター 三船敏郎の山本勘介



図5)川中島の上杉謙信(石原裕次郎)

ろ大物俳優の独立プロダクションがたくさんできて、おたがい協力しながら野心作を世に出していた。この作品もそのひとつである。配役陣が豪華メンバーで、製作費もかなりかけた見ごたえのある作品であった。とくに三船敏郎の山本勘介が、期待にたがわず「七人の侍」や「椿三十

郎」と同じ雰囲気の三船敏郎なので嬉しかった。アクション映画が大好きなアメリカ人には、ミフネの豪胆で大仰な演技は分かりやすくファンも多い。まだ小さかった中村勘九郎（後の十八代目中村勘三郎）が武田勝頼役で出演している。上映中はアメリカにすることを忘れて映画に見入った。

溝口健二監督の「西鶴一代女」が上映された（図6）。原作は井原西鶴の浮世草子「好色一代女」である。江戸時代を舞台に、悲劇的流転の人生を歩んだお春（田中絹代）の一生を描いている。海外で高い評価を得た作品で、フランスのヌーヴェルヴァーグ派に大きな影響を与えたようだ。しかし、私にはテンポがとて遅く感じられた。なにごとくテンポの速いアメリカの生活のなかで見たせいかもしれない。零落の道をたどる女性の生涯という内容も相まって途中で

見るのがいやになり緊張が途切れた。映画はいつどこで見たかも関係するのだろう。いまあらためて見れば違う印象かもしれない。



図6 「西鶴一代女」 落魄した主人公のお春（田中絹代）

哀し過ぎる映画

「あゝ野麦峠」（山本薩夫監督、大竹しのぶ主演）を見た日系女性から

「日本はなんであんな哀しい映画を作るのか。とても哀しかった。上映中泣いてばかりいた」と抗議をうけた。明治時代、飛騨の少女たちが吹雪の野麦峠をこえて諏訪の生糸工場に赴き、劣悪な環境のなかで働く女工史である。じつは私はこの作品を見ていない。かなしくつらい場面が続いたのである。上映される映画の題名だけは邦字新聞の片すみに載るが、出演者やあらすじなどの情報はない。そのため映画のなかみを知らないまま見に行くことが多かった。週末の気分転換に明るい映画を期待して出かけたなら、期待とは大違いの内容で落差が大きかったようだ。これは勝手な想像になるが、日本映画の悲しい場面の映像表現が友人の感情を増幅させた：という気もする。

「泥の河」のきつちゃん

研究室で働く女性が話しかけてきた。「泥の河」を見て感動したという。アメリカのテレビで放映されたらしい。日本では昭和56年に公開された宮本輝原作、小栗康平監督のモノクロ映画である。舞台は昭和30年、太平洋戦争が終って10年目である。まだ戦争の残渣がのこる今よりずっと貧しかった頃である。春日八郎の別れの一本杉や島倉千代子のこの世の花が流行っていた。大阪安倍川河口近くのうどん屋の息子で9歳の信雄は、川岸につながれた舟に母親と暮らす姉弟と知り合う。姉の名前は銀子、弟は喜一である。母親は舟で身を売って一家の生活をやっと支えている。信雄は喜一をきつちゃんと呼び大の仲良しになる。天神祭に行ったり、川蟹を取ったり、川にすむ巨大なお化け鯉におどろいたりしながら、夏の間を楽しく過ごす(図7)。



図7)「泥の河」のきつちゃんと信雄

ところがある朝、喜一の暮らす船がポンポン舟に曳かれて岸から離れていくのに気づく。信雄は表に飛び出し、川岸を走って舟を追いながら「きつちゃん、きつちゃん、きつちゃん」と叫びつづける。しかし舟は窓を閉め切ったまま応えてくれな



図8) きつちゃんの乗った舟が曳かれてゆく
それを見送る信雄

は窓を閉め切ったまま応えてくれな

たが、町はずれまで来て追うのをあきらめる。舟はゆらゆら揺れながらポンポン舟に曳かれて遠ざかる(図8)。友人はこの場面がよほど印象に残つたらしく、私の前で「キツチャン、キツチャン」としきりに口真似をしていた。

この映画を私も日本で見ていたが、

じつはそれほど深い記憶がない。友人が感動した映像をあらためて見てみたい。最近になって原作の小説を読んできた。日本が高度成長期に入る手前のはなしである。読み終わってやるせなく哀切の思いに包まれた。透明感のある美しい文体である。

「伊豆の踊子」を見て

ある日の研究室で「伊豆の踊子」(山口百恵と三浦友和が主演)を見たというアメリカ女性から、あれはどうゆう映画なのかと訊かれた。川端康成というノーベル賞作家原作の有名なラブストーリーだと答えたが納得のいかない顔をしている。旧制高校生が伊豆半島の旅の途上で旅芸人のグループと知り合う。高校生と一座の踊子とがおたがい淡い恋心をいだく。道中ふたりはときどき会話をかわすが、手を握ることもなく熱いラブシーンはない。やがて終着地

下田に着き乗船場で別れる。岬の突端で手を振る踊子(図9)、学生も遠ざかる船から手をふり続ける。映画もここで終わる。日本人にはなじみの純愛物語である。しかし、このつつましい恋愛模様は淡泊すぎてアメリカのひとにラブストーリーとして受けとってもらえなかったようだ。もしいまの日本で上映されれば、どんな反応であろうか。

都はるみの「北の宿から」のテープを日本から送ってもらって聴いていた。アパートの部屋に「着てはもらえぬセーターを涙こらえて編んでます」とはるみのうなり節がひびく。友人たちを招いたホームパーティーの席でこのテープを流したら、アメリカの女性に歌詞を尋ねられた。歌詞の内容を伝えたところ、「着てくれな



図9) 伊豆の踊子
遠ざかる船に手を振る踊子 (山口百恵)

いセーターをなぜ編むのか？」と怪訝な顔をしていた。女ごころの未練は分かってもらえない。「もし愛する男性に裏切られたらどうする」と話がおよぶと「ガンで撃つ」とストレートな返事が返ってきた。アメリカ人と結婚している日本女性が日本の親戚が亡くなったのでお香典を送ろうとしたら、「死んだひとにどうしてお金を送る必要があるのか」と夫婦げんかになったという。そんな話を思

い出した。

「タクシードライバー」

ときどき夜になるとメデイカルセンターの講堂で無料の映画会が開かれる。「カサブランカ」「ドクトルジバゴ」などを見た。「カサブランカ」は1942年（昭和17年）に公開された古い作品だがアメリカでは古典的名画である。第二次世界大戦下、仏領

モロッコが舞台のラブロマンス映画である（図10）。主演のハンフリー・ボガードは亡くなって20年も経っていたが依然人気があった。後日研究室のボスからハンフリー・ボガードとマリリン・モンローの記念切手をもらった（図11）。どうもこのふたりは別格らしい。ほかにジエームス・ディーンやポール・ニューマンの切手も発行されたそうだ。

あるときマーティン・スコセッシ監督、ロバート・デ・ニーロ主演の「タクシードライバー」が上映された（図12）。ニューヨークが舞台で、ベトナム戦争還りのタクシー運転手（ロバート・デ・ニーロ）が主人公である。不眠症になやみ孤独と疎外感に苛まれている。いろいろなエピソードや事件が重なったあと、主人公は手に入れた拳銃でひとを撃つ。アメリカ



図10) 有名なカサブランカのラストシーン



図11) 研究室の教授からもらったハンフリー・ボガードの切手

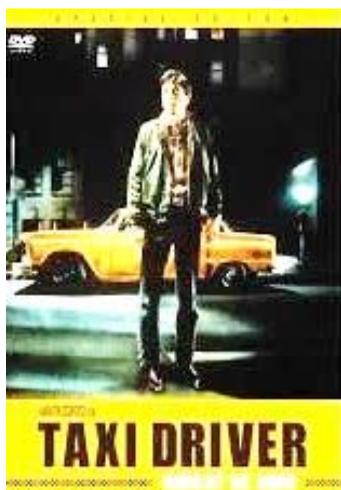


図12) 「タクシードライバー」のポスター
主演はロバート・デ・ニーロ

ンニューシネマの代表作のひとつである。この映画は過去と現在が行ったり来たりして、時制がよく変わったり解りにくい。見終わったあとで一緒に見た日本人仲間とストーリーを話し合ったら、それぞれ違うのでますます混乱した。帰国後、字幕入りを見て本当のストーリーがやっと分かった。見終わって重たい映画であった。ニューヨークの夜景とサックスのけだるいBGMが都会の孤独と憂愁を演出している。

アメリカのSF映画を楽しむ

そのころ「未知との遭遇」(原題は Close Encounters of the Third Kind)や「スターウォーズ」が封切りされダウンタウンの映画館に見に行った。研究室にはSF小説的な「未知との遭遇」派とSFマンガ的な「スターウォーズ」派があった。いずれも発想と良いお金のかけ方と良いアメリ

カならではの映画で、上映中はSFの世界にとつぷり浸かって楽しんだ。わたくしは「未知との遭遇」が大好きで、アメリカでも日本でも何回か見た(図13)。なかでも異星人と音で交信するところが好きだ。異星人の宇宙船が地球を離れるとき何人かの地球人も乗り込んだ。あの人たちはどうなったのかときどき思う。

留学から帰った数年後に学会発表のため再びサンフランシスコを訪れた。ダウンタウンで夕食のあと車で映画館の前を通ったら長い行列が出来ている。映画館に行列ができるのはめずらしいので、何の映画だろうかと知りたくなり、ワンブロック戻り再び映画館の前に来て題名の表示を見上げたら「E.T.」の2文字だけが出ている(図14)。どんな映画なのかさっぱりわからないままに帰国した。しばらくしてから日本でもこの映画が封切りされ大評判となり、あのと

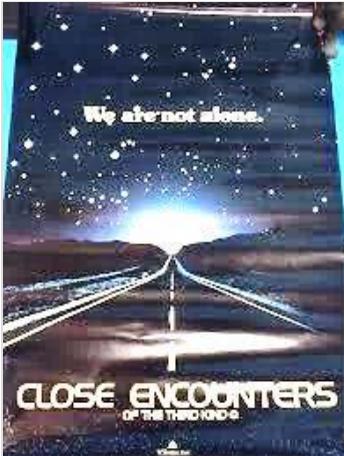


図13)「未知との遭遇」のポスター



図14)「E. T.」のポスター

きの行列が納得できた。

異国の地でなにかとストレスの多い生活をしていると、ときおり見る日本映画は気分転換に役立った。寅さんの口上に笑い、健さん演ずる任侠の世界にとっぷり浸かって、自分が日本人であることを再認識した。日本映画を通じて日米の感性や気質の違いも感じた。あれから長い時間が経ちスクリーンに登場した俳優たちも多くが世を去った。

「東京オリンピック」で懐郷の念

もうひとつ、外国で日本映画を見たときの体験である。わかいころ三か月ばかりヨーロッパをひとり旅した。旅もそろそろ終わりに近づいたころスイスのチューリッヒに着いた。すでに晩秋で寒さが身にしみる。スイス人の友人宅に泊めてもらい、翌晩彼と街なかの映画館に「東京オリンピック」を見にいった。前年に東京

で開かれたオリンピック大会の記録映画である。自転車のロードレースでスイスの選手がスクリーンに映ると、まわりから「Switzerland!」とつぶやき声が聞こえる。マラソンの場面では優勝したアベベ選手にずいぶん遅れて足をひきずったり、よろけながらゴールにたどりつく選手たちの映像が続くと同情のため息が湧いた。やがて映画は終わりに近づく。熱

気と歓声につつまれた大会もおわり、人っこ一人いない陸上競技場が映る(図15)。カメラはゆっくりパンする。森閑として音がない。と、遠くで「オーイオーイ」とさけぶ子どもの声が聞こえる。このシーンのあと突然日本に帰りたい気持ちにおそわれた。体がざわついてじつと座っていられず、立ちあがりたいたい衝動に駆られる。「オーイオーイ」と遠くに聞こえた子どもの声が誘因らしい。市川崑監督の意図した無人の競技場と遠

くの子供の声の演出にはまり、脳どころかが刺激されたらしい。どんよりと寒々しい晩秋の夕暮れであったことも影響していたようだ。異国の地ならではの体験であった。



図15) 昭和39年にオリンピックが開催された旧国立競技場
記録映画の監督は市川崑 大会の熱気と興奮が去り森閑としたスタジアム 遠くでオーイオーイと叫ぶ少年の声
その場面を見たとき無性に望郷の念に駆られた

「事前指示書（終末期の医療・介護・生活など）」

浜名 新

今回、終末期医療における「事前指示書」について考えてみました。

厚労省は2017年12月実施の終末期医療に関する意識調査を発表した。

終末期に備え、どのような医療を受けたいか、受けたくないかを記した書面（事前指示書）をあらかじめ作成しておくことについて、賛成66.0%、分らない29.1%、反対2.1%、その他回答なしの割合であった。

あらかじめ、事前指示書を実際に作成しているか、との問いに、作成している8.1%、作成していない91.3%、回答なし、の割合であった。

自分の終末期医療を巡って、周囲と話し合ったことがある人は39.5%、

話し合ったことはない55.1%で、話し合っていない理由として、きつかけが無い56%、必要を感じない27.4%、なにを話しあつたらよいのか分からない2.4%、話し合いたくない5.8%、その他回答11.8%であった。

人生の最期を迎える場所を決めるのに、考慮する点を複数回答で聞くと、家族らの負担にならないことが73.3%と最多。体や心の苦痛無く過ごせること57.1%、経済的負担が少ないこと55.2%が続いた。

病気が治る見込みがない場合、どこで最期を迎えたいか、と聞くと、自宅は55%、病院は28%ぐらい、その他となっていた。実際の死亡数と医療機関での死亡割合の推移をみると80%から76%が医療機関で亡くなっている。日本全体では130万人が亡くなる多死社会に移行し、2030年には160万人が亡くなる推計値である。出生数は100万をき

り、総人口数は減少するばかりである。

病気が治る見込みが無い場合、死期が近くなつた場合に、延命治療を受けたいか、と聞くと、91%の人は、延命治療をおこなわず、自然に任せて欲しい、と応えている。これは要するに、過剰治療ではなく、最低限の治療・対応で旅立ちたい、と希求していることになる。いかなければ、尊厳死、自然死、平穏死にはかならない。

終末期医療・ケア・生活する場所などについて、厚労省は30年3月、「終末期医療の治療方針に関する決定手順を定めた国の指針（ガイドライン）」を公表した。これは2007年（平成19）、「終末期医療の決定プロセスの指針」について、2回目の指針である。

その要旨は、

*本人の意思を尊重するため、家族らを含め医療・介護従事者と話し

合いを重ねる、アドバンス・ケア・プランニングACPという取り組みを推奨している。

*話し合った内容はその都度文書にまとめておく。病院だけでなく、自宅や介護施設で、みとりも想定して配慮する。

*話し合いに参加する関係者は、家族や親族に限らず、本人が信頼を寄せる親しい友人など広い範囲の人を対象とする。

公表された内容は、入院・入所時、あるいは、日々の経過中に、説明と同意としておこなわれ、必要があれば、書面に記録されてきたものであろう。

医師は担当している入院患者・家族に、検査・治療・病状の節目で、説明と同意の場を設け、ナースを仲立ちにして、患者家族に所見や病状を説明し、互いに意思の疎通を図ってきた内容に相当するのかもしれない。終末期、事前指示書を記録しない

人は多く、まして、意思表示もままならない状況に陥れば、病人と最も親しい人、あるいは身内の人は、医療従事者との話し合いで、病人の終末期医療の意思を付度して、決めねばならないのかもしれない。

2012(平成24)年、当時、拓殖大学総長の渡邊敏夫氏は産経新聞で、「危ない日本の終末期医療」と題して、問題提起された。氏は終末期医療の中で、経管栄養の是非について論じている。以下、その要旨を転写すると、

「食物の経口摂取が不可能となった高齢者の胃に、管を入れて、水分栄養を補給させるのは、自然死を妨げる、過剰医療であろう。人間は終末期を迎えれば、食物摂取を必要としなくなり、嚥下さえ不能となる。人間は死ぬのが原則であり、この原則を人為的に阻止しようとするれば、無用な苦痛を、終末期の高齢者に強要させ

てしまう」

まさしく的を射た論旨で、当時から6年が経過しているのに、安易に経管栄養がおこなわれている現状があると思います。栄養管の留置は、急性期型の一般病院、慢性期型の療養病床で、従来から行われてきたのは間違いのない。どちらかといえば、急性期型病院の方が療養病床より頻度が高いのではないかと。

さて、急性期の一般病院、あるいは、慢性期の療養病床での臨床の現場で、患者の嚥下機能が低下し、摂食不能になれば、担当医は水分栄養保持の手段として、栄養管の留置(胃ろう管・経鼻胃管)を「する、しない」、静脈経由のカテーテル留置を中心静脈、手足の静脈(末梢)に「する、しない」の選択を、患者家族に提示して選択してもらうことになる。患者・家族の気持ちは、大いに揺れ動くと思えます。

そして、急性期型病院においては、水分・栄養保持の方法（長期生存可能あるいは短期生存可能）がおこなわれてしまえば、担当医は家族に転院の手続きに入るよう勧めます。

最近、80歳代以上の高齢者で、食べられる量が少なくなり、そのため、脱水予防もかねて、手足の静脈から低カロリー輸液を併用して、療養病床へ転院してくる人が増えはじめている印象があります。

「肉親である病人は生きてさえいてくれれば、触（さわ）れば温（ぬく）もりがじかに伝わり、なにもものにも代え難い」と考える人は多いと思います。あるいは、「死は怖く、今、現実として、見たくないの、いまは先送りしたい」と思惑を強調するかもしれない。

昔も今も、食べられるうちは食べてもらい、食べられなくなれば、たとえ生存期間が短くなるうとも、苦痛

の少ない、緩やかな自然に亡くなる自然死、尊厳死が得られる手足の静脈からの低カロリー輸液を望む患者・家族は、療養病床において、近年徐々に増えているよう思う。全体から見れば、まだ少数派かもしれないが・・・。

かけがえの無い肉親への愛情、死を先送りしたい思惑の積み重ねから、家族は簡便な経鼻胃管、胃ろう管などを、止むを得ないと許諾し、経管栄養が始まり、患者は生き延びる延命対応が定着し、現在に至っているのでしょうか。

忘れてならないのは、その際、病人の意思は埋没、無視され、あるいは、病人は自分の意思を伝えられない状況だったのかもしれない。もちろん、医療上必要な栄養管の留置の場合もあります。

慢性期型の療養病床でも、数年前までは、食べられている人が食べら

れなくなれば、説明と同意の場で、医師は長期間生存可能な栄養管の留置（経鼻胃管あるいは胃ろう造設）、あるいは、静脈経由の（中心静脈あるいは手足の静脈）の選択肢を提示していた。当時、医師は経管栄養をしない場合のデメリットを強調し、経管栄養を勧める場面が多かったように思う。そのため患者・家族は簡便な経鼻胃管、あるいは胃ろう造設を選択する頻度が多かったと記憶している。

しかし、最近、母親・子一人の強い親子の絆のある場合を除いて、長期間生存できる栄養管の留置ではなく、手足の静脈からの低カロリー輸液を、私は積極的に勧めるようにしている。低カロリー輸液では、水分栄養が全身にいきわたらず、生命予後が短くなることを、十分説明し、理解させ、納得してもらっている。

高齢な患者で、寝たきりで、意思疎通のままならない場合、尊厳を損な

うことはなく、苦痛の少ない、緩やかな尊厳死が得られることを説明している。いかなれば、自然死、平穏死を容認する患者・家族が緩やかに漸増しているようです。

時の流れで、国民の終末期医療の対応に、微妙な変化が起きているのを実感している。経済的理由も無論あるには違いないが・・・。

一方、欧米では栄養管で生き延びている高齢者はいないそうで、相当以前から、そうさせない仕組みが、世間の常識となつているそうです。福祉を充実し、無駄な延命対応を避ける姿勢が、広まっているそうです。

高齢の病人は、突然の病気から自分の意思を伝えられなくなる場合もあるのです、あらかじめ、自分の意思を（医療・介護・生活する場所など）決めて、書きとめておく「事前指示書」が推奨されている。自分ひとりで決められないのであれば、医療関係者、

福祉の人、友人などと話し合い、結論を書面に残すことが、必要と考えます。

終末期医療における事前指示書として有名なものが、日本尊厳死協会のもがあります。会員は11万、協力医1700人だそうです。なお、平成28年1月、私の希望表明書が追加されている。

リビングウイル（生前意思）の要旨です。

* 不治の病で死が迫っている場合には延命処置をお断りします

* 苦痛を和らげるための緩和医療をして下さい

* 回復不可能な遷延性意識障害（持続的な植物状態）では、生命維持措置を取りとめてください

私の希望表明書には以下の項目が記されております。

*最後に過ごしたい場所（ひとつ選択）：自宅・病院・介護施設・その他・

わからない

*私が大切にしたいこと（複数選択）：できる限り自立した生活をする
こと・大切なひととの時間を十分にもつこと・弱った姿を他人に見せたくない・食事や排泄が自力でできること・静かな環境で過ごすこと・回復の可能性があるならばあらゆる措置を受けたい・その他

*自分で食べることが出来なくなり、医師より回復不能と診断された時の栄養手段で希望するもの（複数選択可）：経鼻チューブ栄養・中心静脈栄養・胃ろう・点滴による水分補給・口から入るものを食べるぶんだけ食べさせてもらう

*医師が回復不能と判断した時、私
がして欲しくないこと（複数選択可）：心肺蘇生・人工呼吸・気管切開・人工透析・酸素吸入・昇圧剤や強心剤・輸血・抗生剤・抗がん剤・点滴
さて、急性期型の一般病院で治療

中、病状の安定を図るため、必要な処置が次々に行われ、経過中に出現する合併症があれば克服しなければなりません。そして、治療終了後、摂食機能・嚥下機能が低下していれば、担当医から患者・家族に水分・栄養保持の選択肢が提示されます。すなわち、胃に留置する栄養管(胃ろう管、あるいは、経鼻胃管)による流動食、あるいはカテーテル留置による中心静脈から高カロリー輸液あるいは末梢静脈から低カロリー輸液による方法です。

もし、事前指示書が家族から提示されていれば、担当医は患者の病状と救命的な処置との兼ね合いで、生命維持装置をどうするか、どう折り合いをつけるか、大いに悩むはずです。

一般病院で救命的治療を受けた重症患者の場合、気管切開孔から気管チューブが挿入され、経鼻栄養(経鼻

胃管あるいは胃ろう管)を受けざるを得なかった状況が、療養病床に転院された患者から推察されます。

事前指示書に記載があるからといって、生命維持装置を「行わない」、あるいは、「中止する」、事態は、お互い、医療側も患者側も、避けたいのが人情でしょう。

一方、急性期の一般病院から、病状が安定期に入ったので、生命維持装置がなされている患者が療養病床に転院されたとき、家族から事前指示書を提示されれば、療養病床の担当医は困惑するに違いない。そして、書面の内容に素直に従い、近日中に生命維持装置を「取り外す」、あるいは、「中止する」行為をすれば、告発されるかもしれない。実施することは到底出来ないでしょう。

多くの患者・家族は、担当医に事前指示書を尊重してもらおうにしても、直ちに実行してもらおうことに反対す

るに違いない。

私は、事前指示書を尊重しつつ、家族と話し合いの過程で、生命維持装置の「変更」あるいは「次善の方法」を提示し、家族側に選択してもらおうようにしている。

生命維持装置を「取外す」、「中止する」行為は、患者側にも医療側にも、大変なエネルギーを要する重大事です。何故なら、生死に直結する、大変デリケートな内容を含んでいますから・・・。

数年まえ、尊厳死の書面を持った80歳の男性患者が、一般病院から療養病室へ転院してきました。彼はアルツハイマー型認知症で、意思表示不可能で、寝たきり、嚥下障害がありました。

妻は搬送先の急性期型の一般病院で、担当医から水分・栄養保持の方法を提示され、妻は夫への栄養管の留置は望まず、頸(くび)の内頸静脈か

らカテーテルの留置を選択しました。夫は高カロリー輸液で、水分栄養保持を受けて、入院生活を送っていました。幸い、カテーテルに伴う感染症の併発を認めなかったそうです。

療養病床へ転院1か月後、カテーテルが詰まりかけ、抜けかけ、最終的に抜かざるを得ませんでした。

私は、説明と同意の場で、手足の静脈からの低カロリー輸液に「変更」することを提案し、妻が同意され、それから2か月弱後、夫は旅立たれました。

水分栄養補給の処置をいきなり「中止」など、人道上できないでしょう。プロセスを踏み、お互いが了解しなければ、医療不信を助長するだけです。妻から尊厳死協会の協力医の書面を渡され、必要事項を記載し、本部へ送付した記憶があります。

生命維持の措置には、人工呼吸器から水分・栄養補給まで多種多様で

す。これを「取り止める、おこなわない、あるいは変更する」などに関しては、相当、慎重に、説明と同意を繰り返して、対応しなければならぬでしょう。デリケートな内容ですから。私は次善の方法に「変更」し、「中止」した体験はありません。

以前、人工呼吸器を取り外して、死亡させた、として告発され、書類送検された事件がありました。富山地検は、「人工呼吸器の取り外しは、単なる延命処置の中止に過ぎず、殺人罪として立件するには嫌疑不十分」との理由で、不起訴にした富山射水市民病院事件です。

それを契機に、厚生省は、「終末期の決定プロセスの指針」を公表しました。平成19年(2007)年です。このガイドラインは、病院向けの内容といえるものでした。

私が勤務している病院には、事前指示書に準じた、「蘇生処置拒否DN

R、(Do Not Resuscitate)の書面があります。

終末期医療において心肺停止状態になった時に、具体的処置として昇圧剤使用、心臓マッサージ、気管内挿管、人工呼吸器装着などの蘇生処置を、おこなわないことを「選択する・しない」をどちらかを選んでもらいます。病院は前者を希望しております。

同時に、DNRを選択する場合、以下に掲げる処置、ならびに、治療方針にチェックをつけてもらいます。

(1)・疼痛コントロール・酸素投与・輸液(点滴)・輸血・抗生物質・経管栄養。(2)治療方針として・安楽を重視する・明確に急性期回復可能な部分の治療を行う。例えば、感染症、消化器閉塞など。

私が勤務している療養病床での内容を若干述べます。

入院患者の多くは、急性期の病院

から転院してきます。入院対象患者は、在宅療養困難な人、施設入所不応の人、医療処置が必要な人などです。高齢で、植物状態の重症例では、気管切開、胃ろう、あるいは、経鼻胃管が留置され、少数では、中心静脈にカテーテルを留置され、あるいは、経口食が摂れるときもあるような人には末梢静脈から低カロリー輸液の併用が行われている場合もあります。

入院患者の5割弱は、何とか経口摂食が可能で、一部に食事介助を要し、5割強は経管栄養です。歩ける人はごく少数で、大部分の人は、介護士の介助で車椅子に移乗し、介護士に操作されて食堂、入浴・散歩などに移動します。

入浴は週2回、多くの人は機械浴です。排泄はオムツ中心です。自力で排尿出来ない尿閉患者では、留置バルーンが装着されます。体位交換は2―3時間毎で、その際、オムツ交換

もおこなわれます。諸関節が拘縮し、固まり、骨折予防のため、複数の介護士が担当します。

日々の生活で、発熱、酸素飽和度の低下、嘔吐、血尿、レベル低下などの症状に注目し、必要なら、採血・検尿・胸部X P・CT撮影などを行い、診断確定すれば治療開始します。点滴による午前・午後の抗生剤、24時間の補液、同時に酸素吸入、禁食にすることが多くなります。感染症には抗生剤をやや多量に使います。

主な感染症は、発熱で発症する、誤嚥性肺炎、尿路感染、皮膚筋肉の蜂窩織炎です。進行悪化しますと、血液の中に細菌が増殖し、さらに進行すれば、敗血症になり、細菌毒素の影響で、多臓器不全でアウトになります。喀痰・尿・血液の培養結果を参照して、細菌に効く抗生剤を多めに使います。その結果、患者さんは生き延び、感染・治療は繰り返され、最期に力尽き、

旅立たれます。入院期間5年以上の人もあります。

療養病床では、入院患者のすべての人に、病状が悪化すれば、診断・治療・延命対応します。どうしても過剰医療になります。そのため、患者は、病気と治療の間で苦しみぬ抜き、生き延ばされ、その繰り返しが展開されます。つまり、簡単には死なせてくれません。平均在院日数が長くなり、カルテは分厚くなります。

最近、80歳代から90歳代にかけて、食べられている人が、肺炎治療などから、食べるのが困難に悪化し、飲食がストレスになる場合、説明と同意の場で、私は栄養管の留置を勧めず、単に、手足の静脈から、低カロリー輸液のみで、経過を見られたらと意識的に勧めています。手足からの低カロリー輸液を受け入れる家族が、すこしずつ、増えている印象です。

しかし、子ひとりの場合、入院当初、栄養管の留置を望まず、との考えを「変更」して、栄養管の留置を強く望みます。大切な家族は生きていて欲しいとの気持ち、尊重しなければいけないでしょう。

生みの苦しみは子の誕生で慶びに変換されます。しかし、亡くなる苦しみは、呼名に反応してくれず、切ない呼吸状態が繰り返され、点滴が射し込まれ、酸素吸入がなされ、見た目にづらいことだらけです。看取りが原則ですから、心肺停止してから静寂と平穏が訪れます。大体、年間、医師1人当たり30人弱看取ります。

十分健康で働ける健康寿命(70歳代)と、亡くなる平均寿命(81―87歳)の差は、男性10年弱、女性10年強で、その差の10年間に、老化による身体機能の低下、(誤嚥性、風邪をこじらせて移行する)肺炎、大腿骨骨折、脳卒中発作、階段から転落・転倒

して脳挫傷・急性硬膜下血腫、脊髄損傷、急性心筋梗塞などの急性心不全、間質肺炎の増悪、呼吸不全の増悪、アルツハイマー型認知症が進行・重症化、神経難病の発症と急速な重症化などで、医療と介護が必要になります。

ひとり暮らしの人は、経済的に困窮し、病気がち、話し相手や他人とのつながりが乏しいため、孤立しやすいつながりが乏しいため、生活上の悩みが生じれば、「地域包括支援センター」に相談するのがベターでしょう。天涯孤独のひとり暮らしの場合、入院、住居を契約する場合、身元保証人が必要な事例が多いため、身元保証人を請け負うNPO法人が、全国で80くらいあるそうです。

忘れてならないことは、老化と共に以前の自分らしい状態から、身体機能が低下し、介護度が増し、他人の助けが必要になることでしょうか。

厚労省は在宅医療・介護を推奨しております。いまだ普及しない理由として、24時間対応してくれる、往診してくれるクリニック、あるいは、訪問診療・看護・介護を手がける施設が少ないのが主な理由でしょうか。

われわれは、生活する場所として、個々人の健康度、医療度、介護度、認知症の度合い、財力度、家庭環境などを考慮して、施設(老健・特養)、介護医療院(平成30年4月開設)、療養病床、有料老人ホーム、グループホーム、認知症ホーム、自宅などから選ぶこととなります。

健康でADL(日常生活動作)に制限がなければ、住み慣れた、わがままに、気楽に生活できる、自宅を選択する人が多いと思います。

最期にどこで終末期を過ごすにせよ、数年たてば、そのときの自分のADLは、以前の状態より低下し、自分らしからぬ状態に、悪くなっている

ことが多いようです。自宅にしろ、施設にしろ、病院にしろ、誰かの助け（つながり）を借りなければ、生活することも、旅立つことも、かなわない現実があります。

健康で仕事バリバリの今、「終末期の医療・ケア・生活する場所など」に対する、自分の意思としての「事前指示書」を、書面にして書き留めることが推奨される理由でしょう。

事前指示書をいざ書きとめようとしても、すらすらと書き進めません。そこで、私は、名刺に、「回復不可能、意識不明の場合、苦痛除去を除いて、延命治療を辞退します」日付とサインをして、保険証の袋に一緒に入れて持ち歩いています。生前意思の内容のつもりです。幸い、現時点では未使用状態ですが、果たして、どうなりますか・・・。

私どもは、毎日が「生と死」の連続です。皆さんにおかれましても、わが

身をいとおしみ、朝起きて手足が動くことに、生きる力、安心と慶びを感じると思います。

（平成30、5）

『文明開化 童戯（どうけ）』

百人一首』

河鍋 楠美

私の曾祖父、狩野派の絵師・河鍋晁齋（1831〜1889）が挿絵を描いた『文明開化 童戯百人一首』という版本がある。カルタで有名な『小倉百人一首』の百人一首の下の句はそのままで、上の句に文明開化を象徴する品々を詠み込み、百首全てを滑稽な歌に仕立て直した狂歌集で、狂歌の作者は総生（ふそう）寛である。

『百人一首』と言えば、カルタでおなじみの『小倉百人一首』を誰もが思い

浮かべるが、実は我々が知る「百人一首」とは異なる作者や内容による「百人一首」が、室町時代以降、さまざまな種類が出版されており、これらを総称した、「異種百人一首」は、特に晁齋が活躍した幕末から明治にかけて多数出版された。

本稿では、『文明開化 童戯百人一首』の中から、特に興味を引いた挿絵の一部を紹介する。また、その挿絵に描かれた内容がおわかりいただけるよう、書かれた歌を活字に起こし、その上に『小倉百人一首』の元の歌を載せて、歌を対比させた。下の句の表記を揃え、振り仮名は現代仮名遣いにする等、適宜編集し、同じ下の句にラインをひいた。上段◎は『小倉百人一首』下段○は『文明開化 童戯百人一首』で、図版はすべて河鍋晁齋記念美術館蔵『文明開化 童戯百人一首』である。

開化間もない明治時代の雰囲気、

近代化に右往左往する庶民の心情を
ぜひ味わっていただきたい。

柿本人麻呂・山部赤人 (図1)

第3首 柿本人麻呂 (かきものもとの
ひとまろ)

◎あしびきの 山鳥(やまどり)の尾
の しだり尾の ながながし夜を
ひとりかも寝む

○一時すぎ 二時すぎ三時 四時ふ
けて ながながし夜を ひとりかも
寝む (図1上)

※一人寝のさびしき、わびしき。

第4首 山部赤人 (やまべのあかひ
と)

◎田子(たご)の浦に うち出でてみ
れば 白妙(しろたえ)の 富士の高
嶺(たかね)に 雪は降りつつ

○洋行(ようこう)に 出かけて皇国
(くに)を 見かへれば 富士の高
嶺に 雪は降りつつ (図1下)

※留学した先での望郷の念。



図1 柿本人麻呂・山部赤

参議堂・僧止遍照 (図2)

第11首 参議堂 (さんぎのたかむら
◎わたの原 八十島(やそしま) かけ
て 漕(こぎ出(い)でぬと 人に
は告げよ 海人(あま)の釣舟(つり
ぶね)

○御布告(ごふこく)と 日々新聞を
よむべしと 人には告げよ 海人

(あま)の釣舟(つりぶね) (図2上)
※明治の新政政府が発表する法律、伝
える新聞。

第12首 僧止遍照 (そうじょうへん
じょう)

じょう)

◎天(あま)つ風 雲の通ひ路 吹き
閉ぢよ 乙女の姿 しばしとどめむ

○袴着て 馬をはしらす 町中の
乙女の姿 しばしとどめむ (図2下)
※女学生の制服が袴になり、活動的
に。



図2 参議堂・僧止遍照

伊勢・元良親王 (図3)

第19首 伊勢(いせ)

◎難波潟(なにわがた) みじかき声
(あし)の ふしの間も 逢はでこ
の世を 過ぐしてよとや

○郵便に こゝろの丈を 尽せども
逢はでこの世を 過ぐしてよとや

(図3上)

※明治4年(1871) 4月20日に
東京―大阪間で郵便制度始まる。

第20首 元良親王(もとよししんの
う)

◎わびぬれば 今はた同じ 難波な
る 身をつくしても 逢はむとぞ思
ふ

○横文字を よみて月給 とる時に
身をつくしても 逢はむとぞ思ふ

(図3下)

※外来語が読める人は高給取りに。



図3 伊勢・元良親王

紀友則・藤原興風(図4)

第33首 紀友則(きのともりのり)

◎ひさかたの 光のどけき 春の日
に しづ心なく 花の散るらむ

○異人まで 伴ふて行く 墨田河
しづ心なく 花の散るらむ(図4上)

※外国人と一緒に隅田川の花見に。

第34首 藤原興風(ふじわらのおき
かぜ)

◎誰をかも 知る人にせむ 高砂
(たかさご)の 松も昔の 友なら
なくに

○いろいろの 西洋植木 はやり出
し 松もむかしの 友ならなくに

(図4下)

※植木も外来種が輸入されるように。



図4 紀友則・藤原興風

後京極摂政前太政大臣・二条院讃岐
(図5)

第91首 後京極摂政前太政大臣(こ
きようごくせつししようさきのだいじ
ようだいじん)

◎きりぎりす 鳴くや霜夜(しもよ)
の さむしろに 衣(ころも)かたし
き ひとりかも寝む

○小遣いに 尽きてぼんやり 書生
(しよせい) べや 衣かたしき ひ
とりかも寝む

※金欠学生の所在なき。

第92首 二条院讃岐(にじょういん さぬき)

◎わが袖(そで)は 潮干(しおひ)に見えぬ 沖(おき)の石の 人こそ知らぬ かわく間(ま)もなし

○怠(おろそ)か書生(しよせい)机(こ)の石盤(せきばん)は 人こそ知らぬ かわく間(ま)もなし

※真面目(まじめ)な学生(がくせい)は石盤(せきばん)を拭(ぬぐ)いては書き、拭(ぬぐ)いては書き、勉強(べんきやう)熱心(ねっしん)。



図5 後京極摂政前太政大臣・二条院讃岐

チエーホフを読む (16)

藤倉 一郎

敵

9月のある日、郡会医キリーロフは六歳の一人息子がジフテリアで息を引き取った。妻は冷たくなったわが子のベッドにくず折れて絶望の声をあげていた。その時玄関のベルが鳴ったのでドクトルは自分で玄関へいった。

暗がりですくドクトルの手を固くにぎると男は「おねがいます、今すぐわたしと一緒にいらしていただけないでしょうか、妻が重体ですので、馬車を用意してごさいます」

「おねがいます、すぐ仕度をなすって、一緒にいらしてください。わたしはパプチンスキーとあれこれ話して、お茶してたんです。ところが突然妻が悲鳴をあげて、心臓のあたり

を抑えて、倒れてしまったんです。妻をベッドに運んで、水をかけたり、アンモニアで拭いたりしたんですが、死んだように倒れたままなんです。脳溢血(のうえき)じゃないかと思うんです。」

ドクトルは黙っていたが、「申し訳ありません。五分程まえに子供が死んだんです。」

「なんて間の悪い時にぶつかっちゃまったんだろ、驚くほど不幸な日だ」男はドアの取っ手をつかみ、思いまどつてうなだれた。

「お願いします、先生の立場はわたしにもよくわかります。こんな場合先生の御診察を仰(うや)まうとするなんて、われながら恥ずかしいと思えます。でも一体、どうすればいいんですか? この土地には先生がいいお医者さんはいないですよ。お願いですから、いらしてください。」ドクトルは玄関から広間に戻り、放心状態で寝室へ行った。死のような静謐(しやうみやう)が立

ち込めていた。窓のすぐわきのベッドには眼を見開いたままの少年が横たわっていた。少年の身体に手をかけ寝具に顔を埋めたまま、母親はひざまずいていた。妻のわきに五分ほどたらずでいた後、玄關へ行くとそこには男が立っていて「やつと、来て下さいましたね、さあまいりましょう、どうぞ」と言った。

ドクトルは「いいですか、先ほど申し上げた通り、今日はどうかがえないんです。」

「先生、わたしだって先生のお立場はよくわかります。ご同情いたします、でも、わたしは自分のためにお願ひしているわけではないんです。妻が死にかけているんです。一刻を争う場合なんです。いらしてください、お願いします」

「人間の生命はどんな個人的な悲しみより上のはずです。お願ひです、勇気を出してください。犠牲的精神

を發揮してください。人間愛のため」

「人間愛などと替し文句を並べても、今のわたしは何の役にも立ちません。だからこれ以上頼まないでください。医師法十二条によって、わたしは行く義務があるんです。ですが、口をきくのさえできないんです。お役にたちません。どうか、勘弁してください」

男はさらに言葉を重ね、医者の高潔な使命だの、自己犠牲の精神だのを説いた。

ドクトルは不機嫌に「遠いんですか？」と聞いた。

「ざつと十三、四キロというところですよ。一時間ばかりでまたここへお送りします。たった一時間ですよ。」しづぶドクトルは往診することにした。

途中二人は口をきかなかつた。馬車ははげしく揺れ、石を跳ね飛ばし

ながら、先へすすんだ。ドクトルは悲しみにもだえ、あたりを見回した。丘の上には小さな雲にとりまかれて赤い大きな半月が動こうとせずかかっていた。自然全体が絶望的なものを感じさせた。

目的地につくと男は「何か起こっていたら、わたしはとても耐えられません」二人は玄關に入った。人声も足音も聞こえず、あかあかと灯がともっていた。家全体が眠っているようだった。

男はドクトルを広間に案内し「様子を見えますから、ここで待ってください」というので小さなきれいな客間でまつた。静かだった。

五分程待つと戸口に男が立っていた。彼は顔も手も姿も恐怖と苦痛ともつかぬ醜い表情に歪んでいた。男は部屋に入ると、「あの女め、騙しやがった！逃げちまいやがった！仮病をつかつて、俺に医者を呼びにや

らせたのも、あのプチンスキーと
駆け落ちするためだった。なんと
いうこつた」そして、男泣きに泣きつづ
けた。男は妻の置手紙を床にたたき
つける、虫でも殺すように踏みこ
じった。

「あれは病気ではありません、畜
生です。卑劣だ、実に陰險だ、これ以
上けがらわしい真似は悪魔だって考
えつきませんよ。あの間抜けなピエ
ロと、ツバメと駆け落ちするために、
人を使いに出すなんて、とても耐え
られない」眼に涙をたたえ、全身を震
わせながら、男は自分の心情を真剣
にドクトルの前にさらけだした。

ドクトルは話を聞いているうちに
無関心と驚きが次第に怒りと憤懣と
憤りに変わっていった。「何のつもり
で、そんなことをあらいだらい話そ
うとするんですか、私は聞きたくも
ない、わたしはあなたの愚劣な話を
聞かせるために、こんなところまで

引つ張つてこられたんですね」

男はどなった。「あんまりじゃない
ですか、わたし自身ひどく不幸だと
いうのに、そんな」

男は財布から紙幣を二枚ぬいてテ
ーブルの上においた。「さあ、これが
往診料です。払いは済ませましたか
らね」

二人は立つたままにらみ合つて互
いに不当な侮辱を加えつづけた。

ドクトルは「家に帰らしてもらい
ましょうか」というと男は鈴をふつ
て召使を呼んだ。

馬車を待つ間、二人は沈黙してい
た。

ドクトルは深い醜い皮肉なまなざ
しで男を見つめていた。

ドクトルは馬車に乗つて帰路につ
いた。みちみち男やその妻やプチ
ンスキーを批判し憎み、蔑みつづ
けた。

ドクトルの偏狭な心が不幸である。

ドクトルは男を軽蔑し、自分の悲し
みばかり強調して、男の生活態度を
否定したものだから、男もむかつい
て、ドクトルに毒づいたのである。

これは二人にとつて不幸なこと
である。

見えない法則

八潮 弘三郎

宏史は子供の頃からよく熱を出し、
毎月のように近所の開業医にかかっ
ていた。医療を施す側の予備軍とし
てこの世に存在しはじめののではなく、
医療の施しを受け続ける患者として
青年期までを過ごすことになる。あ
る時、夏風邪をこじらせ感冒の症状
はないが微熱が下がらない状態が一
月以上続いた。診療室の冷房の部屋
にしばらく座らされて熱を測ると少
し下がっていた。かかりつけの小兒

科医は「乳児の病態である夏季熱のような体温調節障害」と診断し、「改善の方策として生活習慣や偏食を改善し身体を強くするためには入院での鍛錬か養護学校への編入が必要」と治療方針を説明した。

母親は医師の推測でしかない見立てを神格化し、小児科への入院や養護学校への編入は、体調を崩す度に「先生がおっしゃるようにこのままではダメだ」と繰り返し諭されていた。小学校の担任は一〜二年ごとに交代したが、どの教師も母親に彼を説得すること依頼されていたことを受け、「養護学校に一度行ってみては？」と説得した。宏史は扱いにくい生徒だったので、担任の教師にとっても養護施設への転校に反対する理由はなかった。母親も担任も医師も、宏史が病気がちなことは彼の周囲の提案を受け入れない素直でない素行を遠因とした理解がいつの間にか定

着していた。宏史自身も身体の調子が悪くなることは、自分のせいだと考え罪悪感を覚えるようになっていた。「ほら、みたことか。養護学校に転校しないで、自分勝手に過ごしているから、また病気になるのだ」と母親は担任やかかりつけの医師の同意を促し、宏史は四面楚歌と感じていた。特に崩れやすい生活習慣と給食嫌いの偏食などを根拠なく原因とする医者は嫌悪の対象であった。体調不良の原因を自らの生活習慣のせいとされ、病気がちな小学生時代を過ごしていた。

このいわば絶対の見立ては適切ではないのではないかと内心考えていた。いつそ自分が白衣を着れば、意に沿わない診断や治療を押し付けられる側ではなくて済むと夢想することもあった。宏史の周囲には、父親そして母親の血縁を見渡しても医業に係している者はいなかった。唯一身

近に存在していた医師は、父が勤務している会社が運営している病院の内科に勤務していた社宅の隣人であった。彼は病気がちであった宏史を勤務外に自宅に往診してくれていた。白衣姿でない医師と遭遇した唯一の存在であった彼だけは、母親が口癖のように語っていた近所の医者を受け売りの病因論には同意しなかった。そんなこともあり白衣を着た医師は総じて嫌いであったが、彼のことだけは嫌いではなかった。

区立小学校に通っていた宏史は勉強嫌いであったが、父親が通った六歳から大学卒業まで一貫した教育をしている私立の学園に入学することを運命づけられていた。中学からの入学を果たすため、小学四年の時から週三回近所の進学塾に通わされていた。進学塾の教師は自作の試験問題を課した。二十人位が習っていたが塾での同級生が当時最難関とされ

ていた国立大学の付属校に合格したので、レベルの高い進学塾であった。宏史の中学受験の結果は父親の出身の付属中学には歯が立たなかったが、別の一貫校に合格できていた。更に系列の医学部への内部進学を制度をもった新設でまだ評価が一定していなかった中高のみの一貫校へも合格した。母親は宏史が病気がちであり医療との縁が切れなかったこともあり職業としての医師への羨望があったのだと思う。母親の少し先を見通した将来像から医学部進学への可能性がある中高一貫校への入学を強く望んでいた。大学進学までの一貫校への入学を望む父親からの強い反対を押し切り、宏史は医学部を中心にした学校法人傘下にある中高一貫の進学校へ母親の夢を内包して入学することになった。

医学部進学には上位の成績が必要であったが、中学に進学すると宏史

は力が同等かそれを上回る同級生の中に埋没し、成績の不振は続き下三分の一角が定位置となっていた。ある程度身に着いた学習能を持っていたはずであった、結果が出なかった。理由はそれまでの暗記を中心にした学習習得技能は全て将棋戦法の習得に向けられていたためであった。障子の棧を見ると将棋盤にみえ、母が買いかめてきた生地に縦横に淡い格子の柄をみても、将棋の駒を配して駒組と言われている定跡の手順を頭の中で繰り返すほど熱中していた。中学の同級生では宏史に敵うものはない、抜群の強さを密かに認識していたので、「将棋指しを仕事にしたい」とまで考えていた。

中学三年生の時に父親は重機械のメーカーの営業マンであったが、父親の勤務している会社もマーケットを外へ外へと向けていった。父親は、宏史が中学三年生の時に東南アジア

に駐在を命じられることになった。それまでしばしば東南アジアへの出張を繰り返していたので、駐在要員としては候補にあがっていたのかも知れないが最初から彼が最適候補者として駐在の話が進んだわけではなかったように思う。父親は以前より酒が深く、毎日家で泥酔し、廊下の左右にもたれかかりながら寝所に向う毎日であったので、とても数年続く海外生活が自己管理できるとは子供ながらにも思えなかった。母親も同様に考え父と一緒に赴任することになった。当時両親の海外赴任に伴う子弟の教育に対する現地の体制はとて貧弱で、中高一貫の進学校に匹敵する学校は整っていないかった。丁度中高の切れ目でもあったので、母親は生活習慣の管理もしてくれる全寮制の都立高校への転校を熱心に勧めた。入学時は医学部への内部進学も母親の視野にあったものの

成績不良の我が子に一流大学への進学
の道はないと判断し、さらに彼女の
持論であった生活習慣の改善と居
場所の確保のため全寮制高校への転
校が適切であると判断していたよう
だった。

宏史はというと「両親の海外赴任
は将棋の世界に飛び込むチャンスで
ある」と全く違った視点で事態を乗
り越えることを考えていた。奨励会
で戦いながら日常の生活は棋士の内
弟子になればよいと考えた。生活も
好きな将棋も一日中でできると空想し
ていた。自分の実力を普遍化するた
め、アマチュアの棋戦に登録し戦歴
を残せば道は開けると計算した。

先ず将棋連盟の主催するセンター
での月例の棋戦に参加し戦歴を残す
ことにした。しかし実際に月例の対
局をしてみると宏史の目論見は大き
く外れることになる。小学生の低学
年と思われる少年たちに連戦連敗と

なった。初めは何かの間違いではな
いかと思ったが、自分の棋力が全く
棋士への道には程遠いことを思い知
った。またスタートの年齢が中学三
年では大きく遅れていることもこの
頃やっと自覚した。思い描いていた
進路が全く見当違いであったことを
悟り、棋士への道は完全に閉ざされ
ていることを自覚し、将来展望を失
い呆然とした。

宏史は母親の勧める全寮制の都立
高校は受験せずそのまま中高一貫校
に通い続けることにした。年の離れ
た姉が海外赴任の前の年に結婚した
こともあり、宏史は独り東京に残り、
祖母の家など今まで一緒に暮らした
ことがない親戚の家で過ごすことと
なった。通っていた高校では行事や
学期の始まりの時などは短縮授業と
なる。また年に五回ある定期試験で
は昼過ぎには終わってしまう。居場
所がない宏史にとっては定時の三時

過ぎまで授業等がない日々は居場所
のない苦痛な一日となっていた。定
期試験の度に科目の平均点と自分の
得点の一覧表と学年の総合順位が記
載されていたものを母親に見せ捺印
を貰い担任に戻すことになっていた
が、両親の海外赴任後は成績を見せ
る対象もなくなつた。病気になつて
も、周囲は宏史の挙動に関心はなか
つた。学校を行き来し恙なく毎日
を過ごしていればよしとされる生活で
あつた。この頃になつて全寮制の都
立高校を母親が勧めていた意味が少
しわかつたような気がしていた。周
囲から孤立した状況となり、加えて
膨大に持て余すほどの時間を持つこ
とになつたが、運動も読書も友人と
の交流にも興味を持ちえず、将棋で
身を立てることも断念せざるを得な
くなり、途方にくれていた。勉強はと
いえば、英語は嫌い、数学は苦手であ
り、全ての科目が興味が持てず、アイ

デンティティは拡散していた。

自らの決定で中高一貫の進学校に留まることにしたので、五年間で高校までの学習過程を終了する予定のプログラムは嫌いでもかつ苦手であったが乗り続けなければならぬ。中学三年生中頃から高校生の学習過程に入り、高校一年で使うリーダーの授業が始まっていた。宏史は心を入れ替え一行目に書いてある単語の意味を全て調べてみたが全く読解することができなかつた。相談する者もいなかつたので、新任の高校生の教科担当の英語教師を教員室に訪ね全く読めない旨を伝えてみた。出来の悪い宏史が相談に行つても相手にされるわけがないと思う自虐的な気持ちもあり、勤勉な学習習慣が必須であることを示唆され、毎日毎日教科書を繰り返し音読する様に言われ、また意欲を失くすはずであつた。

それまで母親、小中学校の教師そ

して幼少期の宏史を診察していた医師は宏史のネガティブな側面を指摘し改善を求められ続けた。宏史が投げやりだったわけでもないとは思うが、成果が出たことは一度もなかつた。しかしその時相談した英語の教師は予測した反応は取らなかつた。彼は宏史の成績や知識の水準を簡単なテストをして確かめ、ちよつと考えて机の前に置いてあつた一冊の参考書を示し、「これを三回繰り返しなさい。そうすれば君が身につけられなかつた文法や読解力は多分解決する」と言つた。前向きな指示を受けたことがそれまでなかつたことと家族のいない毎日で、あり余る時間を持つて余っていたこともあつて百五十ページほどのテキストを数週間できり返した。教師の指示通りまた繰り返すと回答を誤つた問題の数が徐々に減つていくことを体験し、更に繰り返した。

次のチャレンジはあり余る時間を利用して大型書店に向き自分のレベルで対処できる参考書を探した。飽きっぽい性格であることは自分でもわかつていたので、高校受験用の主題別に完結していた六十ページ程度の比較的やさしい問題集を選んで取り組んだ。この分量なら最後までやり通せるかもしれないと考えた。またノートに転記することが苦手だったので、同じものを二冊買い書き込みながら学習を繰り返した。すると二回目は確実に正解が増えることがわかり、中学入学以降初めて自分の学習が肯定されたような気分になつた。心療内科において実践した新しい精神療法による治療法の開発の方略はこの頃体験した自分なりの工夫と肯定された高校時代の学習体験に関係しているように思う。

理系受験のもう一つの要である数学は学校が指定していた問題集の例

題が丁寧に解法を説明してある参考書を見つければ、一題ずつ解説を暗記した。授業で解説を聞いても理解できなかったが、膨大にあり余る時間を持つていた宏史は学校にいる休み時間や下校までの時間に加えて往復一時間半ずつかかる祖母の家と学校との通学時間全てを投入し例題の解法を繰り返し暗記した。すると今まで正解には導けずに興味を失っていた数学の問題の筋道が少しずつ見えるようになり、時には解法ができるようになってきた。それまで一緒に暮らしていた家族が父の海外赴任のためには離散し一人ぼっちになってしまったことと引き換えに三年間の暗記によって入試に臨むに必要な道具を手元に引き寄せることに成功した。

これまでの孤独で病弱でこれといつて取り柄のない負の連鎖から数年後進学先を自由に選べるポジティブな状況に変えていくことを自らに力

で転換できたことが、以降無理そうに思えることにチャレンジしている素地になったように思う。この時期の地味で根暗な一日一日の生活が、心療内科での個別オーダーメイド治療の創生の萌芽になっていったように思う。

宏史が高校三年を迎えようとしている頃に、父親が任期を終え帰国することになった。赴任してから三年猶予が経過していたが、一芸もない宏史ではあったが英語の繰り返し学習と理数系の例題の丸暗記学習によって、医学部を含めた希望する大学への入学の可能性が始めていた。

帰国した母親は宏史の成績の変貌には驚いたようではあったが、浪人生活は体力的に気力の維持も無理と現役での進学に限定し、すぐに医学部内部進学に舵をきり、系列大学の医学部への特別進学の考查を受験することになった。系列校に対して行

われた特別選抜の閾値は彼の持つていた偏差値で通用する合格閾値だったこともあり、入学許可証を獲得することができた。宏史は、私立大学出身のために苦労したという父親の愚痴を幼少期より聞き続けていたので、人生を成り立たせるためには国立大学への進学しかないと考えるようになっていた一方で、身体が弱く、医者通いで幼少期を過ごす間に育んだ医師になることへの憧れから、私立ではあっても医学部への進学は嫌ではなかった。

医学部に進学後、場違いな感じに苛まれ進学過程の二年間は無気力に過ごした。しかし医学の専門課程に入ると身体のカネズムは複雑で、まず基礎医学を学び次に臨床医学を座学で学んだ。身体や病気の詳しい病態生理は細部に至るとほとんどの説明できていないことがわかってきた。医師への道のきつかけになった

幼少期の彼が苦しんだ病態もほとんど成書に説明できる解明がなされていないことも判った。解らないなりに内科学による治療は論理的で身体メカニクに組み立てて介入をしていくやり方は気に入る、医学の学習に没頭した。臨床実習では、治療処置にチャレンジしながら今でいう診療参加型の実習を続け、医師国家試験を通して内科の講座に所属し医師としての第一歩をスタートさせた。

内科の臨床では測定出来ないパラメーターを推測しながら治療に当たる場合もあるが、多くの内科での治療は圧や酵素活性など目に見える測定可能なものを扱いながらその時変化している生体内部が変化していく病態生理を組み立てることができる。目に見えないものも何らかの方法で測定することが出来るのではないかと考え、機能的と区分けされている非器質的な病態を扱う心身症を専門

とする領域に身を投じることになった。大学受験まで自ら工夫した学習が成果を生んだ体験から、出来そうもないものにも手が届くかもしれないという感性が内在し以降の医師の仕事にも少々上手くいかなくても前に進んでいくことができた。身体に比較は備えることができた。身体に比較して宏史が専攻した機能的な病態は多く目に見えないものを扱わないと進めない領域であり、困難なことが多いことは始める前からある程度は予測できていた。

しかし同時並行で習い始めていた精神医学には違和感を持った。精神医学の成書には総論として症状学という章立てで妄想や幻覚などの症状についての説明がなされていた。精神病に特徴的にみられる症状の記述がほとんどで、宏史が関心の強かった精神的には病者と考えられていない患者の示す入院時の不安や検査前

の緊張による不眠など神経症症状については余り言及されていないかった。精神医学は精神病を疑わせる証拠を採すことを一義とする学問なのかもしれないと感じていた。もつとも百三十人に一人という高頻度で出現する統合失調症がまず対処しなければならぬことは自明であり、この一大疾病を見逃さずに適切に早期に対処していくことが課題であることは理解した。しかしこれは宏史の解決したいことが主に扱われる領域ではないこともわかってきた。

医師になり文献の情報検索ができるようになってから徐々に宏史が専攻したいと思っていた領域が既に分野として存在していたこともわかってきた。さらに内科研修中に救命センターの心理的症状を解析しているグループが米国にあることも知り、がんの告知に伴う心理的な症状には一連のプロセスがあることを発見し

た研究も知るところとなつた。乳幼児の観察からの一連の母子間の目に見えない交流の研究をベースにしたものがあることも宏史が知るところとなつた。また日本の精神医学の教科書に記述のある考え方が精神医学ではないことも分かり、知りたかつた考え方がアメリカに力動精神医学として存在していることもわかつた。この考え方の源泉はフロイトである。人の悩みや目に見えない防衛のような考えを使って治療者と患者の間で起きるやり取りは双方の相性のような目に見えないことで情報や質や量が変わっていく。つまりその場で示される症状はいつも不変で変わらないものも存在するが、情況によつて変化する症状もあることを肯定する考え方である。その治療関係で起る交流のモデルは幼少期に交わされる母子関係に源流があり、その関係性は発達し成熟していくと

考えているため、精神病理を中心に組み立ててきた学体系とは一線を画した考え方である。従つて日本の学生用のテキストでは米国で発展した力動精神医学は紹介されてこなかつたと考えた。一方米国での行動医学のテキストを読んでもみると、人々との関係や見えない心の中を記述していく方法を採用していることもわかつてきた。

さらに臨床心理学の中にも宏史が知りたいと思つていた体系があつた。例えば環境に依存して心理的状況が急速に変化する退行と呼ばれている現象がある。さらに人の気持ちを考へる時治療される側の心理状態を主に評価することによつて心理的評価をするものと思ひ込んでいたが、その時に生ずる治療者側の心理的变化を主に評価することによつて病態を見ていこうとする考え方もあることを知つた。更に人と人とが接して

る時にその間にもう一つバッファーを想定して心理的变化をより精度をあげてみていこうとする考え方があつても知つた。カウンセリングの理論に出会つて驚いた。無条件に相手のことを肯定すること、聞いている治療者が自分の考えと一致して聞くこと、さらに聞く人が話している人の話しを、自分の心に響かせながら聞くと、はじめて治療的な関係が生まれると考へている理論があることも分かつた。つまり聞く側の姿勢によつて相談する人の情況は変化するという考え方をベースにしている理論すら存在することも知ることになつた。

医師になつて四く五年目の頃の体験であるが、宏史の関心は直接訴へられてはいない気持ちの変化を捉へる技術の習得と技術の新規の領域への応用に関心が向いた。

しかし心療内科が推奨する治療法

である行動療法的にアプローチを工夫してみても、自律訓練法を応用して仏教における悟りの境地に近い受動的な注意集中を体得しても、また交流分析で裏面交流を理解しても心身症の症状の塊は表面が剥離することとすらく鎮座し続けていた。心理療法の中でも本格的と名前の付いた治療を身に着け、心身症に対すれば鎮座している大きな岩のような病態も氷解するに違いないと宏史は期待した。

そこで宏史は内科的な診断治療に心理的アプローチを加える方式の心身症への対峙の方法を脱し、精神療法を専攻し心身症治療を押し進めることに決め、本格的な精神療法の一つである精神分析的精神療法を学び始めた。

精神分析的な考えに立脚して精神分析的精神療法では、基本的には目に見えるものは扱わない。目に見え

ないものの中で精神分析的な評価を行うときの中心的な概念が防衛である。後の精神分析の後継者たちが防衛を系列化し、防衛の水準という考え方を提示した。勿論防衛も防衛の水準も可視化することはできない。

しかし目にはみえないこの法則は防衛を捉えることができる使い手たちの間ではあたかも可視化されているかのように共有化できる。防衛の水準の組み立て見立てを行う力動的精神医学を導入することによって、可視化できるものを根拠にする方法ではこれまで組み立てえなかった隠蔽された病態をあたかも可視化されているように系統的に扱うことはできると考えた。

もしかしたら病態水準の考え方を導入すれば病態の重いものと軽いものをも区分けできるかもしれないと期待した。更には内科など医療全般で行う身体に向つての治療も心療

内科でのこころを旨指した関わりもいずれも、人との関係が維持できる能力を持つていれば、その後の治療に多少の困難が伴つても、治療を継続することができるはずである。学校や職場での人的交流は、多くの人はある程度我慢して集団の中にいるはずである。時には集団の中にいる他人に救われたと感じ、人というのは捨てたものではないと感じることがある。

その時生じる関係性の基本になるものは一人は本来信頼に足るものである」という感覚の上に成立していると考えられる。この信頼感も可視化することはもちろんできない。見えないものではあるが、本格的といわれるアプローチを行なう時には、防衛にしても病態水準にしても基本的信頼感にしてもいずれも目に見えないものをあたかも見えているように扱つていくことになる。病態水準

という概念との出会いによって、それまで目に見えない人の間に流れている無形で認識できないとされてきたものが有形とはいえないまでもある程度言葉で状態を表現できるものとするこの可能性を感じた。目には見えないモヤモヤしたものがある程度客観的に認識できるものとして拍動を始めた瞬間である。

精神分析に関する公開の講習会があり、プログラムに初學者への公開スーパージョンが組まれていた。難治化するパニック発作を繰り返す時に尿漏れを起こしてしまうケースであった。スーパージョン途中で高名なスーパージョナーは突然「このケースは初心者が扱ってはいけない。これ以上公開でケースを検討するのは止めたい」と言い始めた。最初何かスーパージョナーが教えを受ける態度などの聴衆からは見えない関係にスーパージョナーが腹を立てて

しまったのかと考え聞いていた。司会の役割を受け持っていたもう一人の重鎮が「なぜ公開でのスーパージョンを続けてはいけないのかをわかりやすく解説していただけないか」と伝えると、スーパージョナーは口ごもりながら家庭内の隠蔽された暴力が強く疑われるケースであり、これ以上治療を進めてはいけない。また公開でのケースの検討すらも続けない方が良くと判断している旨を伝えてくれた。

このケースは表面的には聴衆としてケースの検討を聞いていた宏史には訴えられている症状は治療の禁忌になるような大問題を扱い始めているとは思えず、治療者が初学のこともあって謙虚にかつ熱心に治そうと対応していることは、聞いていてもよくわかったので、よい治療ケースとしてカウンセリングが始まっていると思つて聞いていた。それが導入

の一部を聞いただけで、これは続けたいいけないとなつて一見軽そうに見えるが、実は初學者が手を付けてはいけない最重症のケースだと教えられ、次の日の臨床が怖くなるほどの衝撃があつた。つまりスーパージョナーには宏史を含めた聴衆や症例を担当し公開のスーパージョナーに提出したケースを担当した治療者には全く見えないものが、彼には明瞭に認識できてしまったに違いないと思つた。

講習会は土曜日と日曜日の二日間で行われていた。宏史は講習会が終わり日曜日の夜に新幹線で東京に戻り、次の日の月曜日は心療内科での初診を担当していた。公開スーパージョナーの見立ては多分間違っていないだろう。そうだとすると、外来での診察のため面接構造でお会いしているのと比べ圧倒的に情報は充分ではなく、しかも不安定な外来構造

でも面談であるために軽重すら判断つかないで診察を継続していることになると感じ、自分の再診の外來で治療を続けているケースのうちに「一見軽そうに見えていても昨日スパーバイザーが指摘した最重症のケースが知らずに紛れているかもしれない」と恐怖を感じていた。宏史が担当している心療内科では精神的な不安や抑うつなどの内面的な悩みを身体化した形で症状を訴える患者が主に来診するので、元々精神症状を呈する患者より、抑圧メカニズムはより複雑であると感じていた。つまり登校することが困難な症状がある時学校は好きなので行きたいが、お腹が痛くなってしまうので行けないと訴えるケースは心理的に不安があると訴えているケースよりも抑圧はより複雑であると感じるのと似ている。心療内科という標榜であることで身体症状が前面に立ったかえって

防衛水準としてはより重症なケースが紛れ込みやすい要素がある。更に大病院の初診外來であることに加えて土曜日曜の休みが続いた翌日である月曜という要素もより防衛が込み入ったものが来院しやすい要素になっているとも思う。

いつものセッティングで外來が始まった。医局員が二人陪席についてくれる。月曜日は家族が異変に気がついてひとまず心療内科に来診という相談が多く、直ぐに精神科に紹介しなければならぬケースが少なからず来診するのが通例である。また現在通院中で治療抵抗と解釈できるような、経過としてはいい流れできているものの上手くいっていないと感じ、セカンドオピニオンを求めて来診するケースも集中しやすい。この来診患者に治療が上手くいっていないほど、他の施設に移らなければならぬと感じると説明する。

治療抵抗であると診断すると「あなたは治療半ばでむしろいい山を越えようとしている。是非元の治療施設に戻って治療を続けていただいた方がよい」と説得し、元の施設に再び戻るのであるとわかるようになったのも精神療法を本格的に学ぶようになって得られたものである。

日常の診療では平均すると五人程度が初診で来診され、一人の初診患者に予診と診察で一時間程度を要するので、午前中は三時間しかないの時間が足りない状況で進められていく。加えて大病院なので学生教育も同時に行っていくので、臨床実習の最高学年の学生が二人ないし三人初診に陪席する。そうすると狭い初診外來に五ないし六人が来診者に対面することになり、診療構造としては初めて来診してくださる方にはなかなか圧迫的な場面となってしまう

う。医学部の卒前教育と医学部付属病院特有と言える卒後の常勤医師たちへの臨床教育を同時に毎週行うという相当に無理のある治療構造でもあった。一見軽そうに見える重いケースの話しを聞いたばかりであり、怯えながらしかしある程度道理のわかった教える人として卒前卒後の教育にあたる場面でもある。将来治療の名人になるかもしれない医学生たちのロールモデルになるかもしれないので、逃げ隠れするわけにもいかない。

世の中は皮肉なもので、見立てに怯えを感じている時に限って本当に一見軽そうに見える重いケースが来院してしまう。若い女性が来診した。まず予診で最高学年の学部生が予診を取るようになってくるが、ケースが複雑と考えられると卒後研修中のものが担当するように外来の医長にあたるものが振り分けを決める。こ

の振り分けもまた目に見えない軽重の判断である。来診した女性は医学部に割り当てられた。複雑でないと思われたことになる。主訴は頭痛であった。彼女は「結婚して数年たつがご主人が朝の早い仕事で三時とか四時に起きて始動するので、生活のリズムが結婚前までと大きく違っていて身体に負担になっていっているような感じがする。以前から頭痛持ちであった」と訴えた。見立てに来診時の服装も重要である。素敵な服を着ているかどうかということではなく、服装は診療時の気持ちにフィットしたものであるということである。彼女は式服を思わせる黒いスーツを着て来診していた。初診時の応答も的確であった。予診時に慣れていない医学部生が問診するわけであり、毎週月曜日は週単位で実習場所が変わっているの、今日が心療内科は初めてという医学部生が担当することになった

が、彼女は必要な情報は的確に出してくれている。彼女が自分の状態をある程度客観的に話すことができるということとは病態としては安定したサインである。しかし一方でそんなに安定しているならば何も混雑が前提の大病院の心療と名を冠した診療部に来診する必要はない。近医で鎮痛薬や筋弛緩薬を貰えば彼女の主訴である頭痛はある程度よくなる。それをわざわざスーツを着て、住まいからやや遠方にある大病院の心療内科に来診している。応答してみてもある程度ご自身で表面的な病態生理は把握していると感じさせる。

この時宏史は「もしかしたら目に見えないものが内在しているのでは」と思い緊張した。一見軽く見えるが重いケースではないかと心配になり途中で教育的な診療ではあったが問診を切り上げ、最も丁寧な問診をする医局員の外来に再診を振り分けた。

医局員の再来では陪席を置く習慣はなく、医師と患者だけが対峙するこ
とが出来た。宏史としては自分であ
と数回受診してもらえば、緊張感を
持つて接した感性が正しかったかど
うかある程度確かめることができる。
そしてその後の対処も無理なくより
適切な治療を考えることができる。

しかし今回は多くの陪席のいる診療
場面では実はという話しはそぐわな
いと思つた。初診の見立てには、「一
見軽そうに見えるが重いメカニズム
を背景に隠蔽されているかもしれない
ので、陪席のない診療構造を要す
る」と書いた。心身相関の予測は診療
録には保留と書いた。頭痛を訴えた
主婦の方の訴えは、日曜日に受けた
講習会でのケースのように初学者は
決して手を付けてはいけないと釘を
刺した経過のように直感していた。
その後再診を担当した医局員から経
過の報告があり、夫が長く続いてい

た深いアルコール習慣に関係しての
常態化した夫婦間の家庭内暴力が背
景にあった頭痛であったことが報告
された。

彼女が病院に解決を求めたという
ことは、頭痛の訴えが殴られた時の
痛みとの反映であることが被害者であ
る本人と加害者である夫との間だけ
の秘密としておくことが出来なくな
ったことになる。そして暴力の加害
者に非があることは明らかなので被
害側から求められれば密室での生活
は解消の方向に向かう。加害被害の
関係にあつても当事者同士の暗黙の
了解が成り立っているうちはかろう
じて平衡状態が成り立つが、しかし
被害と感じているものが例えば白衣
を着た者に問題の介入を求めると、
当事者同士の間でだけ成立していた
平衡は成り立たなくなる。それまで
一緒に暮らすことをお互いに合意し
日常の生活を共有し続けるは難しく

なつてしまう。

家庭内の隠蔽された暴力が親子の
間で起こつた場合は無意識の世界に
隠蔽されることが多く、自分が悪い
ことをしたので叱られたと感じ、合
理化されてしまうことが少なくない。
親子関係は契約関係によつて成り立
っているものではなく血縁という必
定の中で関係が成立している。更に
子は家庭内に居ることしかできない
状況にある。更に経済的にも自立で
きていない状況であるので、被暴力
の状態であつても家庭内にしか留ま
ることしかできない。従つて被暴力
の状態にあつても加害者を断罪する
ことはできない。したがつて心理的
に被害者が無意識に閉じ込めやすく
なるため、親子関係において起きる
家庭内暴力の病態は深刻になつてい
く。このように本来は全面的に信頼
することが出来るはずの親から、子
に向けて暴力が振るわれることが常

態化していると、親子の間に本来は芽生えるはずの基本的な信頼関係が形成されない。暴力を受ける時期が早ければ早いほど子には対人に対する基本的信頼感の形成が難しくなる。親子の信頼関係を作り損ねた時期が早ければ早いほど人というものを信用できなくなっていく心根ができやすくなる。

しかし今日の来診のケースは成人してから以降一緒に暮らす約束をし、一緒に数年暮らし始めてから以降に起こった暴力・被暴力の関係である。一緒に暮らす約束は親子関係とは違って書面をもって行う契約関係である。夫婦における契約関係の遂行も解消も書面をもって行うことが出来る。心理的にも無意識の世界に抑圧して押し込み維持しておく必要はない。第三者に事態を言語で伝えることができさえすれば、多くの場合加害被害の関係が認定され、それまで

たとえ密室の中でも出来事として隠蔽されたものであっても言葉にして伝えることができる。このようになるかもしれない過程を無意識に感じ、彼女は黒いスーツであらわれ、夫婦関係の終焉を決意した喪服を意味したものであったのだろうと後で思った。

心療内科は身体症状が問題で、その背景に心理的問題があるいわゆる心身症を診察するところと宏史自身も医学雑誌に繰り返し書いてきた。学会で心身症の定義や心療内科の適切な診療範囲も明示してきた。心身症として来診することについて、身体症状を主な問題にしているものを来診することを周囲に示せば示すほど、一見身体症状だけに悩んでいるようで軽そうに見えるが実は抑圧された心理的問題を症状には出せないでいる心理的には精神症状を主な問題にするよりは重篤なケースが来診

するようになっていいると思えた。既に十分に情報は受け手側に伝わっていて、背景に家族内で身体的な暴力を受けた体験や家庭内において力の弱い子供や女性が性的なものも含めた家庭内での暴力を受けた又は現在も受けている来談者が少なからず受診できる受け皿になっていくことができるだろうとも考え始めていた。

言い方を変えれば、身体症状にエネルギー転換した状態を主に診察する心療内科にはここで想定している精神療法的にアプローチすることを検討すべきものの中に重症のケースが軽症のケースと酷似した形で目の前に現れてくることになる。そう考えていくと心療内科で診療していくには、身体症状が取れにくく難治、身体症状が強すぎて難治という視点のみならず、心理的に重いと見立てられる病態を持つているので難治であろうと識別ができるようにならないと

心療内科に受診してくださった方に満足を得て帰っていただくことはできない。相談していただく方には意味のある還元を施すためには、目にはみえないものも加えて手掛かりにして、何とか手を付けてはいけない重い病態と軽快が見込める病態を区別していかねければならない。

精神医学の症候学では妄想や思考の障害など問診で存在が確認できる症状を抽出して、より精神的であるかどうか区別することによって診断学はある程度目的を達する。神経症的病態も了解という論理でこれまたある程度診断することができる。大枠はこれで旧来からのこの二つの枠組みの中で識別できそうである。加えて心療内科では先からの課題である一見軽そうに見えるが実は家庭内暴力や家庭内の隠蔽された暴力が内在している重症のケースを抽出することである。家庭内で起こっている

ことは余りに日常的なので、「家庭内暴力も僕が悪いことをしたので叱られた。体罰を受けても仕方がないことを自分がしたので自分が体罰を受けるのは当然である」という感覚を持ちやすいため訴えとしてあがってこない。心理的に負担が大きくなり精神症状が前面に出てくればその顕在化した部分は精神科での治療対象になるので、受療が行われ、加療に至ることができ。しかし同じような刺激を受け続けているが精神症状ははつきりとは出現しないが、暴力による身体感覚だけは自覚されている。内科的外科的に受けて刺激による物理的結果には内科的内服であったり整形外科的処置であったりと医療の手を差し伸べることはできるが、心理的な部分は訴えとして出にくい。ため、医療の手が差し伸べられにくい。

そこで心療内科という診療部が存

在すれば、一般的には比較的軽症と考えられる不眠症やパニック障害の訴えが多く受診するいわば精神科より受診しやすい診療科が存在することになるので、家庭内の隠蔽された暴力の被害を受けていたものが、知らず知らずのうちに加害者となってしまう者たちへも医療の手が届く可能性があると考えられる。

隠蔽された病態を扱っていくようにすることはこれまでであった既存の臓器別診療体制の構造的ではカバーしきれない状態があることを認識したことになる。目が痛いという訴えに眼科が対応し、耳が痛いときには耳鼻科が対応するという単純図式では成り立たないこととなり、この単純図式を心療内科は科にまたがった診療を行うため臓器別診療の欠点をある程度補うことができる可能性がある。これを担うことができる心療内科になるためには、隠蔽された症状

を持つているが、表面化されない一見軽そうに見えるが重症のケースを識別できる方法を確立しておく必要がある。つまり精神的な重症なものとは神経症的な軽いものを二別するのは既存の精神科で用いている精神症候学で現存する症状を分析していく方法で可能である。しかし精神的な症状が認められず一見神経症に見えるがきわめて困難であるケースを別の方法を導入することによって、もっと層別に細かく識別することとはできないかと考えるようになっていた。目に見えないものは宏史にはその違いがあたかも目に見えていくようになってきたような発展を感じるようになってきていた。

当時厚生省の特定疾患に神経性食欲不振症という重症と考えられている病気を扱いはじめていた。十代の少女たちがダイエットをしてスタイルの良いボディを得たいと思うとこ

ろまでは一般的心性である。しかし一部でやせへの希求が度を越した時には三十キロ以下の激やせ状態に至り更なるやせを希求するという特殊な病態が認識され始めていた。食欲不振症の予備軍は沢山いることになるが、短期間に激やせしていくとなると数はそう多くはない。やせが強くなると月経は停止してしまうことに加え、ホルモンや身体臓器機能にも異常が発生し内科的な介入を必要とする事態に至る。かつ頑固なまでに食べることによつて身体が太ると感じることへの拒否感があり心理的アプローチが必要とされる病態である。宏史が入局する時点でも大学の心療内科にちらほらと紹介される形で入院するケースが存在してはいた。宏史は心療内科が設立される以前のナンバーを冠した内科講座で一年目に担当したケースの中にも神経性食欲不振症に罹患している若い女性を

三か月ほど担当したことがあった。その後一年後別の大病院から治療の照会があり一転して過食による肥満の状態で加療中であるが、食欲不振症の時の病態が知りたいと連絡を貰い仰天したことを思い出す。もちろん米英の最先端の医療現場では概念は確立しており不食と過食は時期をずらしても出現することは知られていた。しかし当時の日本では食欲不振症は下垂体系のホルモンの異常が顕著となるため、身体的な問題を説明すれば治療の糸口が掴めるはずであるという内分泌的なものが原因として絡んでいるという考えが先端の研究者の中にも存在しており、必ずしも心理的なことによる疾病ではないのではないかとという仮説を基にした研究も存在していた。

しかも食欲不振症に早くから注目し、行動療法を組み込みよい治療成績を上げている国立大学があり、ま

た心身症の拠点病院として機能していた国立病院でも盛んに研究と臨床が実践されていたため、当然のように専門にケースと治療に当たっている国立大学や国立病院に食欲不振症に罹患している患者は集中していた。東都大学には人手も治療経験も少なく、治療には特殊な経験の蓄積が必要であることは明らかであったのでどちらも持ち合わせて宏史の勤務する大学病院にケースが集中することはなかった。そんな中宏史の所属する東都大学心療内科も研究協力者として研究班の末端に加えてもらうこととなった。

しかし宏史の所属する東都大学心療内科では薬物による心身症周辺の疾患に対する新規薬物の開発に力点があり、神経性食欲不振症の研究班には主力は注がず、教授に代わって宏史が報告会に参加することが多く、報告書も宏史が作って提出していた。

そんな状況が数年経過するうちに特定疾患の班長を務めていた働き盛りの関東の心療内科の要であった教授が急逝した。東都大学心療内科には医局員は数えるほどしか在籍していない弱小組織ではあったが、医学部の臨床講座となっていたおり、責任者は教授職であったことから、国立大学出身でない私立大学の教授であった宏史の上司が、厚生労働省の研究班の班長に急遽指名されることになった。そうなると班長の大学の臨床教室が対象とする疾患は専門外で診察しないというわけにはいかず、また責任者となったことが新聞・雑誌等を通して世間に知られるようになり、一人また一人と思春期やせ症の入院のケースが増えていき、とうとう小さな教室のメンバーが総がかかりで治療をせざるを得ない状況になっていった。経験に裏付けられていない体当たりの治療は治療者の真実

性は伝わりやすいので連戦連敗ということとはなかった。治療体系を心得ている者は教室員にはいなかったわけではあったが、連日連夜討論を繰り返している、治療方針の改訂を繰り返している、治療的アプローチが難しい疾病とされていたこの疾患において、少しづつではあるが病態が緩和するケースが出始めてきた。

例えば年齢は三十歳を過ぎ、体重は三十キロを割った状態でリストカットの既往もあり、当時知られていた予後不良の全てを兼ね備えた病歴を持った患者が当時有力とされた他施設での治療がかなわず、東都大学心療内科に入院となった。治療にあたるグループも覚悟した。いつものように経験の浅い治療者が束にかかって真実性を前面に立て治療に当たっていると半年くらい経過で中心となる症状が軽快し、患者の自己に対する肯定感も持てるようにな

り、治療の経過を振り返ってみると随分よくなってきていると評価できた。体重が増えただけではなく、全体像が病気から抜け出したような印象を治療に当たった皆が持った。このケースをきっかけにそれまで入院で比較的充分な情報が得られ、ある程度充分なアプローチを完遂しえた症例を振り返って検討してみると、これまで指摘されていた予後不良因子を複数持っているケースの中でも軽快しているものが少なからず存在することが判った。一方で治療反応しやすいとされた全国調査で明らかにされた因子を備えたものが必ずしも良い経過が得られたとは言えないこともわかった。

なぜこのような全国調査の結果と相反するような結果が得られたのかについて再度宏史を含めた食欲不振症の治療としては非専門家の心身症治療集団である教室のメンバーで相

談した。その時教室では他の施設で効果が経験的ではあるが実証されていた行動療法的アプローチは採用していなかった。それは宏史が幼少期に身体が弱かった患者体験に深く関係していたように思うが、宏史たちは治療者と患者の間で内的な治療関係を構築していくことを主軸におき、

強固な治療共同体を形成することによって精神的アプローチと言われているような個人精神療法を推進してゆく方針をとっていた。この治療的接近によると目に見える臨床症状の中に予後不良とされ、治療が難渋した治療歴があったとしても、目には見えない家族との関係性がある程度保たれているケースでは治療者との関係も維持されやすく、基本的信頼感の再構築がある程度できてくとケースの経過が安定し、その後家族からの支援も受けやすくなり、病者にとっても病態が整理されやす

くなり難治とされていた一部の症例が軽快したと考えた。

つまり治療者患者関係の中で対象恒常性の維持が可能になれば、精神的接近が受けやすくなり、入院でも手をかけた治療に反応しやすい状況ができることを掴んだ。

神経性食欲不振症以外の身体症状を主にした難治性とされ他施設から紹介受診し入院治療を行ったケースを人と人との関係性から見直してみると、やはり同じように関係性の中で基本的信頼感の樹立を旨指した治療に反応するケースの中に良好なケースが少なからず存在することもわかった。つまり幼少期から築いてきた親子間の信頼関係や熱心な治療者との治療的接近という目に見えない要素によって病気改善へのステップが得られてきたことを実感していた。その頃超大学的な精神分析を学ぶ勉強会が二年を単位に継続されてい

た。教室で採用しようとしていたア
プローチの理論的裏付けを求めて、
宏史が門を叩き、フロイトのケース
を読み解いていった。当時最新であ
った境界性人格構造の理論について
も習った。これらの人格障害とされ
ていた患者の特徴は防衛水準として
は神経症が示す抑圧等の防衛よりや
や低下した状態した羨望や分裂とい
ったより低位の防衛水準を示すこと
が共通していた。患者が示す目に見
える臨床症状によってその特徴が規
定されているわけではない。目には
みえない防衛についての理解を宏史
は徐々に身に着けることになった。
特に境界性人格構造の分裂という防
衛の理解は重要で、目に見えるもの
ではないよい対象と悪い対象を二色
に分けて周囲の事象を捉えてしまう
認識の癖を特徴としていた。

一般的なものも悪いものを区別
する認識としてはやや良いものとや

や悪いものともう少しはよいものや
やや悪いよりはもう少し悪いものな
ど色々な段階がありそうであるが、
この様々な段階をよいと悪いの二つ

に分けてしまう捉え方である。一見
シンプルで素直でよさそうな反応様
式のようにも見えるが原始的な防衛
機制と考えられ、成人がこの防衛を
中心に示すと対人関係に色々と弊害
が出てくる。存在している周辺の人
の言動などの行動は、中にはよいこ
とだけしかしない人はいるかもしれ
ないが、建前と本音というか一点の
曇りもない人はなかなか存在しない。
分裂の機制では対象関係を成立させ
るとよい対象と思ってもややや良
いと思われる事象も少し悪い要素を
含んでいるため二つに一つなので悪
いカテゴリーに入れてしまうように
なると周辺に良いとカテゴリーされ
るものがどんどん減ってしまうこと
になる。また別に部分のことをすぐ

に全体のこととして普遍化してしま
う特徴も分裂の防衛の一つだと考え
られている。

また部分との対象関係を全体と認
識してとらえてしまうと、大体はよ
い行動をとっている人であつても一
つ悪いがあると認識してしまうとそ
の黒い対象との関係をその人の全体
であると認識してしまうと最初はよ
い人だと思つて関係を成り立たせて
いる人であつても、一つ悪いが見つ
かるとその度にオセロゲームのよう
に多くが黒に裏返してしまう。それ
まで大体は白い丸であるよいが盤上
に一杯あつて中に黒があると考えら
れる場面が、一転大体は白い丸良い
対象と考えられている人もどこかで
一つ黒い丸があると認識したとたん
に全体が黒の悪い対象と認識してし
まうことになる。部分対象関係を全
体対象関係に乗せ換えてしまう捉え
方も一見合理的な考えのようにも思

えるがこの認知様式では人との関係が継続しにくいため恒常的な対象関係が維持できないことになり、未熟な防衛様式であると考えられている。

いずれも目には見えない認識しにくい症候である。つまり心療内科の入院治療において精神療法的なアプローチを続けていくとき、その方が示す防衛の水準がより高位のものであるか低位なものであるかによって、より神経症に近い経過を示すのか、また精神病に近い経過を示すのか、加えて境界性人格構造特有の経過をとることになるのかを区別することが出来る可能性が示唆される。目に見えない防衛を推定することで区別が可能になる。

当時の心身症学会に精神分析を教えてくださったという講師陣の先生が一般発表の演題として目に見えない防衛のよって区別される病態水準を評価することによって治療による反

応性を予測する最も適切な因子であると摂食障害のケースの集積の中で言えるという発表をされた。宏史は事前に学会の抄録をみて内容を事前に確認し我が意を得たと喜んだ。心療内科の精神分析門下の他の大学や病院に所属しているなじみの面々たちも集結し、討論場面でも優れた知見であることを確認できた。目に見えない防衛水準を評価することに高位のものは二者関係が成立していることもあり精神療法的な治療に反応しやすく、二者関係が成立するまでに到達していない場合は面接等の二者関係構造から関係を通して治療者からのメッセージを受け取りにくくなり精神療法的に治療には反応しにくくなる。予後を予測するとされた目に見える症状によって病態の重さを予測しようとするよりは目に見えない病態水準を使った評価の方が優れていたことを確認できた。先生の

発表は一定数の症例集積を行ない統計解析したものではなかったが、充分目に見えないものを評価に使うことは病気の予後を予測することができると宏史は確信できた。

以降心療内科の重症度の判定は神経症水準と精神病水準の間に境界性水準を置き、防衛水準を三つのカテゴリーに分けて啓重を扱うこととした。防衛水準によってケースを区分けし、予後がある程度予測しながら治療していくこととした。更に境界性水準を防衛水準の程度により低位、中位そして高位の三つに分けてより精密に分類しながら関わりや予後を予測する仮説を立てた。自分がひとつひとつのケースを評価していくときには防衛水準が境界例水準と評価されるものの中で、より高位な防衛水準が主になっていたりものとより低位な防衛水準が主になっているものを区別して経過を評価する様にはし

ていたが、宏史の研究で予後や経過の違いを統計的に実証するまでには至らなかった。しかし目に見えない病態である防衛が予後を予測する因子としては優れたものであることは宏史たちの経験例で目に見える症状から予測することに比べ識別が優れていることは確かである。しかし一般にこの評価方法が広く普及しなかった理由は治療者間の一致度が高くなかったためである。防衛の評価に慣れていない治療者と宏史は評価を一致させる必要はないとも考えていたので、宏史にはできる防衛評価の手法で重症度評価を続けていくことになった。

病態水準の評価で対応や予後予測を推定していくためには精神分析的な中心概念である防衛を評価しないと水準は評価できない。しかし防衛はリストカットや気分が変わりやすいといった現象を観察しただけでは

評価することが出来ず、複数の観察現象を重ね合わせ中心となる防衛を推定していかねければならない。厄介なことには中心となる防衛は状況に依存しながら変化することになっており、更に対象との関係でこれまた変化することになる。更には加わったストレスに対応するために退行し水準の低下を繰り返す。面接が始まる前と面接している時と面接が終わった一回の前後でも常に揺れ動いている不安定なものである。しかも防衛の不安定性が防衛水準を推定する要素でもある。この不安定性を根拠に事象の評価を扱おうとしているところに力動精神医学を扱うもの力量が問われるところとなるが、一方で不安定なために治療者間の見立ての違いが起りやすくて全ての評価のポイントで不一致が起きうるものであることも否定できない。しかし一見正常に見えるがどこかが違うよ

うな印象を持ちつつ精神症状すら明確に訴えていない心身症類縁の病態を示す患者を見立てていくには目に見える症状のコンプレックスを多変量で解析し因子をいくらか抽出しようとしても本態を捕まえることはできない。隠蔽されてはいるが見え隠れしている考えや行動の癖を注意深く見極めることによって透いて見えてくる防衛をそして複数作動している防衛の水準を意識しながら細かく変化し続けている短期での行動の連鎖を積み上げていくと、初めて中期の見立てが可能となる。宏史は防衛という目に見えないものを扱える技能を会得した時神経症ともいえない精神病ともいえない中間の病態として区分けすることができるようになり病態を捉えにくい心身症としての一群に対しアプローチの方向性や近未来の予測を立てる指針となりうるものを身に着けた。

防衛は目に見えないものではあるが、宏史には病態水準の認識の整理によつて、あたかもサッカーの試合でのディフェンスラインのように、テレビ中継の解説者がモニター画面にタッチペンであたかも線が存在するように赤字でゾーンを示しているような明瞭さを持つて評価することが出来るまでになつてきた。

宏史が病態水準評価にたどり着くには、病弱なそして努力の足りない甘えん坊の少年が医学生へと変化してゆく生い立ちが深く関係していたように思えた。

イスラエル再訪

和田 秀敏

—SPTU—

イスラエルにもう一度行きたいと

思つた。

もはや遠い昔二十代の終わりにイスラエルの病院で夏季研修する機会を得た。これがこれまでの平凡な自分の人生においての最大のエポックであり忘れられない青春の一コマである。当時のイスラエルは第三次中東戦争、いわゆる六日戦争後、中でも重要な東エルサレムを占領したばかりで、落ち着いて研修できるか心配したが杞憂に過ぎなかつた。

今もなお戦時国であるイスラエル再訪はリスクを伴うし、足腰がしつかりし体力があるうちには是非とも行きたかつた。昨年暮れ、とあるツアーに参加し、空路より入国しやすいヨルダンからの陸路イスラエルに入国した。トランプによる米国大使館エルサレム移転問題と重なり入国審査は予測した通り厳しいもので、若い不愛想な女性の審査官の上から目線の執拗な質問攻めには辟易し、こ

れからのイスラエルの旅の不安を助長するものであつた。そういえば初めてイスラエルを空路テルアビブから入国した時も同じような経験をしたが、若くもありそれほど負担にならなかつたことを思い出した。

夕闇迫るエルサレムの街に入ったとき、四十数年前不安いっぱい乗り合いバスからエルサレムの中心部にあるバスターミナルで降り立つた時と佇まいはほとんど変わらない。当時と比べエルサレムは人口も五倍に増え大都会に変貌しているが、高い建物が少なく時の流れをあまり感じさせかつた。

翌日エルサレム旧市街の散策に出かけた。病院研修中は何度旧市街を訪れたであろうか。病院の仕事が一段落する夕方バスでそのまま旧市街に出かけダマスカスゲートからアラブ地区に入り、門の前に林立する小汚い食堂で夕食を摂つた。再び訪れ

た旧市街はまるで時間が止まったかのような悠久の静寂な世界に驚きを隠せなかった。

旧市街の悲しみの道、聖墳墓教会云嘆きの壁など有名な観光地を現地ガイドに案内してもらったが、過去に何度も訪れた聖墳墓教会など懐かしさを通り越し、ようやくもう一度この地を訪れたことで心がはちきれそうである。

旧市街観光の最後にイスラム教の預言者ムハンドが一夜のうちに昇天する旅に出た黄金のドーム、岩のドームを訪れた。黄金に輝くドームと教会を取り巻くように飾られた青色のタイルのコントラストが美しかった。礼拝堂の中を覗いてみたかったがイスラム教徒以外は立ち入り禁止とのことである。

教会の入り口でぼんやり開かずの扉を眺めているうちにもはや忘れかけていた遠い昔に誘われ甘酸っぱい

思い出がよみがえってきた。病院研修中、遺跡の発掘調査隊のボランティアとして参加していた女子大生と知り合いになった。当時日本で付き合い始めていた女房もやはり薬学部女子大生で、不安な国へ出かけるのを言葉少なに反対した。日本を旅立つときに新宿御苑で初めてデートした時の写真を一枚、英和辞典の間に挟んで持参し、每晚ベッドに入るたびに自分にとって最果ての異国の地の寂しさをねぎらうように眺めていた。

イスラエルで知り合った女子大生は都内の有名女子大の英文科に通う三年生で、名前も大学名の一字から拝借したS子さんという。ショートカットの可愛らしい女性であったが、都会育ちのせいか学生にも関わらず洗練された立ち振る舞いと、物怖じしない積極性にはあつという間に魅了されてしまった。

S子さんとはイスラエル滞在中何度かデートを重ねたが、テルアビブで夜店を徘徊したことがいまだ懐かしい。その時へブライ語で書かれた大判のポスターを何枚か購入した。Sさんが先にイスラエルを離れる前日のお昼にエルサレムで最も有名なイタリアンレストランで昼食を摂った。

それから思い出の旧市街に入り、これまで何度も訪れたが教会の中に入る事ができなかった岩のドームに行くことにした。幸いなことに教会の扉は大きく開けられて、帰国間際に中をのぞき見することができた。門衛に尋ねると礼拝堂に入ることもできるという。イスラム原理主義の国家は今なお女性性はイスラムの教会に入ることはできないが、当時は女性も入ることが許されており、ノースリーブのワンピースを着たSさんは入り口で借りたショールで肩を

隠し、二人で教会の門をくぐった。

いよいよ別れの時一通の封筒を手渡され、また日本でお会いできれば良いですねと短い言葉を残し帰国のためテルアビブのホテルに向かった。その後S子さんと再び会うことはなかった。

二度目のイスラエルから帰国して果たしてあの思い出の封筒はどうしただろうかと思つた。先のイスラエルから帰国後一年して結婚し、東京から福岡に帰り、福岡で数回転居した。そのたびに荷物を整理しもはやこの封筒は当然ながら紛失したものと思つていたところ、当時東京のイスラエル大使館でもらつた「イスラエルという国」という本の間に四十数年間捨てられもせずひっそりと眠っていた。

封筒の中に一枚の絵葉書を見つけ取り出してみるとベツレヘムの荒野を描いた絵葉書の面に「Bon Voyage

短かつた数か月間ご一緒した時間は少なかつたけれども、いろいろ有難うございました。あのきれいなスケッチは和田先生の半身だと思つて大事にします。またお会いできることを楽しみにしつつ、さようなら。S子」と書かれていた。そういえばイスラエルでスケッチした旧市街の水彩画の一枚をプレゼントしたような気がする。

それから時間は残酷に流れていく。帰国後結婚した最愛の女房にも三年前先立たれ、この奇跡的に残つていた一枚の絵葉書を眺めながらS子さんはその後幸せな人生を歩んだであろうかと甘酸っぱい感傷に浸る毎日が続いている。

―オリオンの星―

イスラエルにもう一度行きたいと思つた。

昭和49年の6月イスラエル、エルサ

レムのハダサ病院で夏季研修するため羽田空港から二日がかりの南回りで出発した。

イスラエルはこのわずか5年前ヨルダンとシリアと戦火を交え、第3次中東戦争、のちに六日戦争といわれる短期間の決戦で東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区、ガザ地区、シナイ半島、ゴラン高原を占領した。そのわずか三年後の昭和47年5月、世界同時革命を目指す重信房子が結成した日本赤軍はイスラエル、テルアビブのロッド空港銃乱射事件で死者二十六名、負傷者七十二名をたず大惨事を引き起こした。実行犯三人のうち最年少の岡本公三のみが生き残り、アイヒマンなどが入れられたラムラ刑務所に収監されている。主犯の奥平剛士はじめ三人は死してオリオンの三つの星になろうとしていた。

二年前の二月、何の気なしに購入

した「別冊週刊新潮60周年創刊号復刻」の中に昭和45年8月28日号に掲載された岡村公三の「テルアビブまでの旅」が復刻されている。その中にほとんど忘れかけていた米国のアンバサダー大学の後藤脩博士の名前を見つけた。その時もう一度イスラエルに行こうと思った。

テルアビブロッド空港襲撃事件のわずか二年後エルサレムの病院で研修を始めた。日本人に対して警戒や偏見を危惧したが、病院のスタッフは親切に対応してくれたし、病院の中で日本人の生化学の연구원や看護師に会うこともできた。しかし町中に出ていくと日本人は皆無で、自動小銃を肩にした若い兵隊が多数我が物顔に跋扈しており、この国がいまだ緊張状態にある戦時国であることを認識させられた。

ロッド空港襲撃事件の同じ年連合赤軍によるあさま山荘事件が発生し

世間を騒がせたが、もはやそれまで盛んであった学生運動は下火となり、当時の日本人はその後の「総括」と称する凄惨なリンチ事件までも他人事のようにテレビで観戦した。それほど日本の世俗からかけ離れた出来事である。ロッド空港襲撃事件は知っていたても、その後の顛末は知らないままにテルアビブ、ロッド空港に降り立った。岡本公三がその時空港そばのラムラ刑務所で服役中など知る由もない。

ハダサ病院研修中ユダヤの安息日（シャバット）を利用してネタニアへの旅行を計画しダウンタウンのバスターミナルに駆け込んだときはすでにテルアビブ行きのバスは満席であった。座席はないがそれでもよければ乗車は可能ということで、入り口付近の網棚に荷物を置き手すりにつかまり出発を待っていたところ、最後尾座席の米国人の若者の集団が

ら声がかかり、窮屈ではあるが少しずつ詰めるから座れという。二時間足らずのバスの旅ゆえ座れなくても大丈夫ではあったが、好意に甘えることにした。ロッド空港を迂回しラムラ刑務所に近づいたとき一台の軍用車に行く手を阻まれ、自動小銃を携えた兵隊がバスに乗り込んで、あちらこちらを指さしながらヘブライ語で何かを叫んでいる。その後バスの乗客から「アー」というため息が流れバスを降り始めた。何が何かわからないままに入り口の網棚の荷物を手に取り降りようとしたとき、屈強な兵隊二人にバスの外に乱暴に放り出された。どうやら兵隊は不審な荷物を調べていたのである。離れた場所に荷物を置いたために疑われ嫌疑が晴れるまで荷物の中身を厳しく調べられた。途方に暮れて首をうなだれ起立する自分の前にはラムラ刑務所の長い壁が連なり、壁の向こうに

岡本公三が収監されていようとは夢にも思わなかった。

アンバサダー大学の後藤脩博士には先にイスラエル滞在中少なくとも二度お会いしたと思う。後藤博士は日系二世の大学の神学部で教授と紹介を受けた記憶がある。自分のハダサ病院研修の全額は日本のイスラエル遺跡発掘調査隊の費用の一部を流用したもので、世界一周の航空券も含めてアンバサダー大学がスポンサーであった。後藤博士がイスラエルに滞在されているのはスポンサーを代表して発掘調査隊を見学に来られたものとはばかり思っていた。

イスラエルを離れる前テルアビブのヒルトンホテルの後藤博士のお部屋でお会した。博士のお部屋は会議室を構えたスイートルームで緊張の面持ちで部屋を訪ねたことであろう。どのような物件でどのような話をしたかほとんど記憶にないが、英

語と日本語の入り混じる冗談混じりの洒落な会話で、米国の乗用車のプレートナンバーはお金をはらえば自分の好みで作ることができ、自分のナンバーは「GOTO・・・」であるということ、またホテルの部屋に放置していた100ドルの小切手の束のうち二枚が不在中盗まれていたことを話され、たぶん部屋付きのメイドが盗んだと思われるが、全部を持っていかなかったのは素晴らしいと「レ・ミゼラブル」のミリエル司教のごとくにこやかに話されたことだけが今をもつて覚えている。

岡本公三の「テルアビブまでの旅」の終わりに、岡本公三がロッド空港襲撃事件のあと心の平静を求めて旧約聖書、新約聖書に接したと書かれている。そして驚いたことにこれらの宗教書に目を向かせ関心を与えてくれたのは後藤脩博士であるという。そして岡本公三は後藤脩博士に会え

てようやく懺悔する気持ちになったと告白している。

私が後藤脩博士をお見受けしたのは博士が発掘調査隊を見学に来られたのではなく、たぶん岡本公三に会いに来られたのだろう。岡本公三は今なおレバノンで生きながらえている。週刊誌に復刻された手記を何度も読み返しながら、当時イスラエルであった温和な後藤脩博士との関係に想いをはせた。そうだもう一度イスラエルに行ってみよう。

ネボ山

イスラエルにもう一度行きたいと思った。

もはや遠い昔イスラエルを訪れた。ヘブライ大学附属ハダサ病院形成外科での夏季研修のためである。第三次中東戦争（六日戦争）や日本赤軍がかかわったロッド空港銃乱射事件など世界を揺るがすキナ臭い時代では

あつたが、無事研修を終えさらにヨルダン川西岸地区、ガザ地区、ゴラン高原などの占領地区も見学することができた。

イスラエル側から死海やガリラヤ湖を隔てた対岸の対戦国であったヨルダンを眺め、今度はヨルダン川からイスラエルを望みたいと思つた。

昨年の暮れ念願のイスラエルを再び訪れ、ありきたりの宗教施設を見学のうち、今回の楽しみの一つはヨルダンからイスラエルを望み、中でも乳と蜜の流れるユダヤの民の目的地である約束の地カナンを見下ろせるネボ山に行つてみたかった。

昨年の12月31日の大晦日、ヨルダン側で死海に入り浮遊体験をした後ネボ山に向かった。山頂には平成12年ヨハネ・パウロ2世訪問記念碑の丸石やモーゼの青銅の蛇に因む十字架、4世紀の教会の遺構が残つて

いるモーセ記念協会などを見ること

ができる。山の上から死海やヨルダン渓谷の先にエリコを一望でき、これこそモーセが目指した乳と蜜の流れる約束の地カナンであろう。

モーセはエジプトからイスラエルの民を率いて脱出し、40年の間シナイ半島の荒野をさまよいその間シナイ山で全知全能の神、エホバから十戒を授かつている。

モーセは神の怒りをかい約束の地カナンに入ることなくこの地で120歳で亡くなったとされている。何故モーセは40年もの長い間神の怒りをかうほど放浪したのであるうか。京都大学名誉教授の歴史学者会田雄二は約束の地にユダヤの民が入るにはエジプトで奴隷根性が染みついた民では入る資格がなく、そのため世代が変わるおおよそ一世代彷徨つたであろうとしている。

モーセの死後神はヨシユアにヨルダン川を渡るよう命令する。ヨシユ

アの指導の下イスラエルの民がカナ

ンに住む諸民族を武力で制圧し約束の地を征服していった。

約束の地カナンを見下ろす丘の上に立ち、今やパレスチナとの紛争地区ではあるが、数千年の昔脱エジプトからたどり着いたユダヤの民のまたモーセの終焉の地であることを思うと眼下の荒涼とした景色が輝いて見える。先のイスラエル訪問ではこの国の歴史やユダヤ教、キリスト教に対する興味もなく、その後宗教書を読み漁るにつけこの歳になってネボ山に行つてみたいと思つた。ようやく現実のものとなりほとんど興味のなさそうな周りの観光客の中で一人上気している自分がそこにいた。これでようやくイスラエルで見学した旧約、新約聖書の世界と結びつき、イスラエルにもう一度来て本当に良かったと思つた。

医芸俳壇



静岡 岩本 漂人

ジヨウビタキ羽根ふくらます氷点下
ツグミ鳴き飛びゆく先は寒夕焼
春がすみ櫓を漕ぐ音はライチヨウか
セキレイの走る暗渠に水の音
ムクドリムクドリの巢ある空家に重機かな

東京 福神 規子

のぼさんのぼさんの一世をおもふ萩に蝶
菊月や母の着物に女紋
切絵めく空の青さや柿たわわ
繭蔵に繭の残り香秋深し
音絶えし機屋小路も雁の頃

東京 福富 清子

七夕竹に軍事郵便結ひしこと
古墳址の径絢爛と蛇ふさぐ
核いちる「ヒト」に戒め劫暑はも
昼寝覚め人減る国の静けさよ
雨戸繰るや虫の嬺歌のなだれ込み



医芸歌壇



きだ

東京

小松安彦

フローラは左手を挙げ植物に咲けと叫びぬ三月の末
フローラはさみどりの葉に覆はれて我の声などもう聞く気なし
若葉とはもはや呼べないツピツピと鳴く鳥さがすこと諦める
アルカディアの記憶はよぎるアルテミス神殿の階君と昇りき
あかねさす紫の薔薇ぬばたまの夜の女王よ五月の君は

沖縄

茨城

羽生藤伍

天高く椰子の樹並ぶ林にて灯り漲る夕食パーティー
沖縄のマングローブの林過ぎ東支那海の波静かなり
首里城の赤と金との正殿は琉球王の玉座なりけり
香気あり林檎の味に近ければ、ハイナップルと沖縄の人ら
首里城や東支那海美女等見て那覇より茨城空港に帰る

秋

東京

林

宏匡

朝の日に多のころ草のつやめきてほのかに揺るる秋きたるらし
朝なさな暑さとほ和らぐ道の辺に雀子雀群れて飛び交ふ

大葉子も狗尾草も枯れにつつ路傍さみしき季は来ぬめり
園児らは散歩の時間往診の吾が手を振れば手を振りくれぬ
わが街の柿実小さくも熟れそめて秋は愈々深まらんとす

家猫小次郎(二)

ふたとせ

東京

横

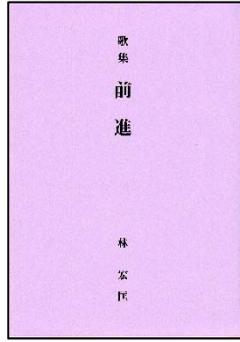
田英夫

大手術受けて二年経ちにけり長寿表彰を受けしばかりに
水飲みてその場に直ぐに横になる少し弱れりと思ひ居りしが
口にては伝え難きかメールにて家猫小次郎の死を伝え来る
ダンボール箱に納まり安らぎて常に変わらず眠り居ること
佛壇に細き首輪の置かれあり赤く小さし鈴付けしまま

歌集『前進』

林 宏匡 著

『ひとつのいのち』に続く林先生の
第十四歌集



平成二十六年から平成三十年までに
発表した作品を中心に纏めた歌集



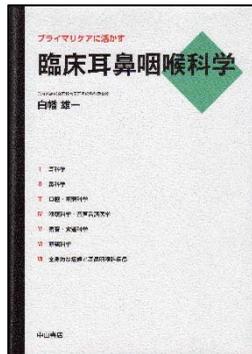
《前略》「主客一体の歌境」を求めて
齢八十を重ねて、尚、四苦八苦して
成った集である。「八十の三つ児」と
いう諺があるが、本集を手にとられ
る諸賢には将に、嬉戯して小児の如
き作品が目につくことと存じますが、
人生の徒然に小生なりに一首一首精
魂込めて詠み上げた積りでありませう。
歌集名「前進」は小生の尊敬してお
りました《中略》、満百五歳で逝去さ
れた故日野原重明先生の生活信条の
一つから拝借致しました。
故日野原重明先生は常々、「老いて
こそ自由人」、「老いて尚、創める心」
で日々「前進せよ」と唱えて居られま
した。《後略》

【あとがき】より
(湖笛会・二、五〇〇円)

プライマリケアに活かす
『臨床耳鼻咽喉科学』

白幡 雄一 著

耳鼻咽喉科医が耳鼻咽喉科周辺領域
疾患のさまざまな臨床上の疑問にも
答えられるよう解説した一冊



耳鼻咽喉科学の対象となる耳、鼻副
鼻腔、咽頭、喉頭という器官は、それ
が頭頸部に位置するというだけであ
って、解剖学的にも、生理学的にもま

まったく異なっている。しかし、それらの器官のうち、中耳、鼻・副鼻腔、咽頭、喉頭は同じ発生源を持つ粘膜によっておおわれている。したがって、そこにみられる炎症には共通の傾向があつて、一つの学問領域をなす要因の一つである。《中略》耳鼻咽喉科学は、人間が生存するために欠かせない呼吸と食物摂取の門戸を扱う学問であり、また人間が人間らしく生きるために重要な多くの感覚器を研究と診察の対象としている。高齢化を迎えた今日の時代、人間が文化的で健康な生活を営む上で良好な感覚呼吸、飲食物の摂取が必要不可欠であるかぎり耳鼻咽喉科学は今後さらに重要性を増していく学問の領域である。《後略》

【序文】より

(株)中山書店・一六、〇〇〇円

※近著を事務局までぜひお送りください。

原稿募集のお知らせ

次号（2019年後期号）締め切り

紙原稿 2019年8月20日（火）

データ原稿 2019年9月20日（金）

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

都合により2018年後期号の発行が遅れ、2018年後期号のまま、この時期の発行となりました。次号は11月頃発行予定の2019年後期号です。次号の原稿を募集いたします。データ原稿と紙原稿でのご投稿締め切りを分けさせて戴きました。メールまたはFAX、郵送にてご連絡ください。

次号は『文芸特集号』を発行予定です。購読をご希望の方は事務局までメールまたはFAXにてご連絡ください。一部五〇〇円を予定しています。

引き続き、会員の皆様のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

※今号及びバックナンバーも一部五〇〇円にて追加購読も承っています。ご希望の方は事務局までお知らせください。

白矢勝一絵画展



個展を記念して発行された画集

新宿の京王百貨店内、京王ギャラリーで2回目の絵画展が開催されました。連日多くの来場者があり、会期中には祝賀会も行われました。

ギャラリー内には大小さまざまな大きさの絵が壁一面に展示され、海外の風景画や人物画、静画など、題材もさまざまで、来場者の目を楽しませてくれました。

白矢先生もお忙しい中、連日会場

に顔を出され、来て下さった方々とお話されていきました。

祝賀会には、医家芸術クラブの先生方を始め、白矢先生の学生時代のお友だちやお仕事関係の方と、たくさんの方々が集まり、大変にぎやかな楽しい祝賀会となりました。



【画集・随想Ⅱ旅行についてⅡより】
絵画が私にとって大きなライフワ

ークとなつてしまったということ、今更当稿で改めて述べる必要もないことである。一方、仕事の合間を縫つてのわずかな期間であるが、ヨーロッパを旅行することも年二回の恒例となつた。

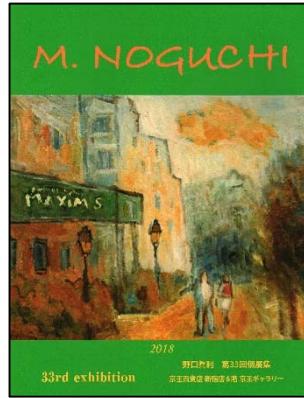
実はこの絵画と旅行二つへの関心は、誠に好ましい相乗効果があり、私の人生の後半を有意義なものとしている。《後略》

白矢勝一





野口眞利絵画展



個展を記念して発行された画集

【画集内 『はじめに』より】

《前略》昨年は、水彩にパステルを載せてみました。今年は水彩に油絵の具を加えてみましたが、紙ベースに意外と絵の具ののりも悪くなく、良い練習になったかも知れません。

今まで、彩光条件の悪かった室内から明るい戸外で描いてみましたが、風・空・太陽のエネルギーの中で試みると新しいエネルギーが湧いてく

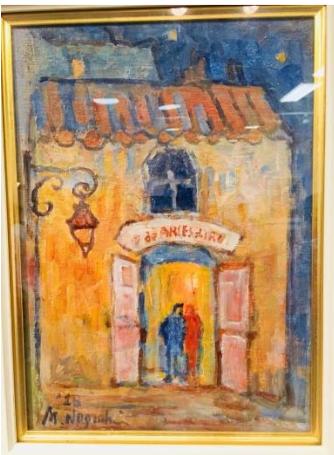
るのを憶えます。《後略》

野口眞利

個展を訪れて

白矢 勝一

個展の開催おめでとうございます。
美術部でご活躍されている野口眞利先生の絵画展が、新宿の京王百貨店で、平成30年8月30日〜9月5



日まで開催されました。多くの方が来場されていて、野口先生の絵画に興味深くご覧になっていました。

京王ギャラリーでの個展は今年で3回目、個展自体は通算33回目だそうで、益々、絵に勢いが感じられ野口先生らしい作品の数々が展示されていました。

今後の益々のご活躍を楽しみにしております。

表紙の言葉

『人生の坂道』

立川市 岩瀬 光

この写真は、東北大学医学部の学生時代、全国を旅しながら撮影をしていた時のものです。もちろんポジフィルムで、今みたいに大量に撮れず、たった1枚撮れた写真です。

場所は岩国錦帯橋、太陽に向かって、橋を登る夫婦、影は橋の上に落ち、男性の背中が曲がり、片足が上がっております。太陽に向かい、登っていく姿は、老夫婦とはいえ、未来に進む感じがあります。坂道を上る姿から、私は題名を『人生の坂道』と名付けました。今思っても、こんな偶然の写真が、良く撮れたと思います。私の代表写真として、第一写真集『光と影の交響詩』のトップを飾っている写真です。

これからも、国内、海外を巡りながら、今となっては、デジタルカメラでバシバシ撮りながら、いい写真を生産していきたいと思えます。

【第47回医家写真展出品】

編集後記

諸事情により発行が遅れ、発行予定だった二〇一八年後期号をこの時期に発行させていただきました。

総会にて各部の活動の見直しなど、色々な変更があり、今号より印刷会社も変更いたしました。機関誌『医家芸術』は残していくとの方向で決定しましたので、次号も発行に向けて原稿を募集いたします。

色々ご迷惑ご心配をお掛けして申し訳ございません。今後ともどうぞよろしく願います。

(ES)